平成29年度

全国公共図書館研究集会

（サービス部門　総合・経営部門）

北日本図書館連盟研究協議会

報告書

研究主題　もっと地域の中に図書館を

ー図書館の多様化する社会的役割ー

期　　日　平成29年11月30日（木）・12月1日（金）

会　　場　東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）

〒980－0803 仙台市青葉区国分町3丁目3－7

主　　催　公益社団法人日本図書館協会公共図書館部会

北日本図書館連盟

宮城県教育委員会

宮城県公立図書館等連絡会議

主　　管　宮城県図書館

目　　次

開催要項 …… ２

基調講演 …… ４
「図書館の多様化する社会的役割」
跡見学園女子大学 文学部 教授　植松　貞夫　氏

事例発表① …… １５
まちのにぎわいや交流を創る図書館
伊丹市立図書館「ことば蔵」　館長　綾野　昌幸　氏

事例発表② …… ２４
「マルシェ　本活（ほんかつ）プロジェクト」青空の下で本を楽しもう
～本と人をつなげる 出前図書館～
新庄市立図書館　館長　　高橋　一枝　氏
館長補佐　郷野目香織　氏

事例発表③ …… ３３
『つなぐ』　本との出会いは きっと 人との出逢い
～０歳から１００歳まで楽しく憩う図書館づくり～
鹿角市立図書館　館長　小林　光代　氏

情勢報告 …… ４０
公益社団法人日本図書館協会

全体会（パネルディスカッション） …… ４３
もっと地域の中に図書館を　―図書館の多様化する社会的役割―
コーディネーター：植松　貞夫　氏
パネリスト　　：綾野　昌幸　氏
高橋　一枝　氏
郷野目香織　氏
小林　光代　氏

開催要項

１　研究主題

もっと地域の中に図書館を　―図書館の多様化する社会的役割―

２　趣　　旨

これまでの図書館は、「静かに本を読むところ」、「調べものをするところ」とイメージされることが多かったが、社会の変化に対応し、地域に根ざした図書館づくりや各関係機関との連携など、果たすべき役割も多様化してきています。近年、これまでの図書館のイメージを覆すような様々なイベントや取組を行う図書館も増え、地域のニーズに合わせた図書館の姿や活用方法へと変容してきています。

今回の研究集会では、図書館に求められるものがどのように変化・多様化してきているか、新たな取組を行うきっかけや、取組に際し課題をどう解決したかなどを通し、地域における各図書館が新たな可能性を探り、それぞれに目指す役割を考える契機としたいと思います。

３　主　　催

公益社団法人日本図書館協会公共図書館部会

北日本図書館連盟

宮城県教育委員会

宮城県公立図書館等連絡会議

４　主　　管

宮城県図書館

５　期　　日

平成２９年１１月３０日（木）・１２月１日（金）

６　会　　場

東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）

〒９８０－０８０３　仙台市青葉区国分町３丁目３－７

７　参 加 者

全国の公共図書館及び関係機関の職員、学校及び教育委員会の関係者、図書館活動の関係者並びに図書館に関心のある方

８　日　　程

（第１日目）　１１月３０日（木）

12:00	13:00	13:20	14:50	15:05	17:05	17:15	17:30	18:00	20:00
受　付	開会式	基調講演	休憩	事例発表	休憩	情勢報告	移動	※１ 情報交換会	

※１　情報交換会：スマイルホテル仙台国分町店　３Ｆ宴会場「楓」

（第２日目）　１２月１日（金）

9:00	9:20	10:50	11:00	11:10	11:40	12:40
受　付	全体会 （パネルディスカッション）	休憩	閉会式	移動	※2 図書館見学	

※２　閉会式終了後、仙台市民図書館へ移動（徒歩約５分）→見学後現地解散

９　内　　容

（１）基調講演

演　　題：「図書館の多様化する社会的役割」

講　　師：跡見学園女子大学 文学部 教授　植松　貞夫　氏

（２）事例発表

①　まちのにぎわいや交流を創る図書館

発表者：伊丹市立図書館「ことば蔵」　館長　綾野　昌幸　氏

②　「マルシェ　本活（ほんかつ）プロジェクト」青空の下で本を楽しもう

～本と人をつなげる 出前図書館～

発表者：新庄市立図書館　館長　　高橋　一枝　　氏

館長補佐　郷野目　香織　氏

③　『つなぐ』　本との出会いは きっと 人との出逢い

～０歳から１００歳まで楽しく憩う図書館づくり～

発表者：鹿角市立図書館　館長　小林　光代　氏

（３）情勢報告

公益社団法人日本図書館協会

（４）全体会（パネルディスカッション）

もっと地域の中に図書館を　―図書館の多様化する社会的役割―

コーディネーター：植松　貞夫　　氏

パネリスト　　：綾野　昌幸　　氏

高橋　一枝　　氏

郷野目　香織　氏

小林　光代　　氏

＜基調講演＞

「図書館の多様化する社会的役割」

跡見学園女子大学 文学部
教授　植松　貞夫　氏

こんにちは。ご紹介いただきました植松です。よろしくお願いいたします。みなさんにお配りしたプリントは，１０月の初めに提出したものでして，時間が経ち考えも変わってきたところもありますので，話の順番などが違うところがあるかと思いますが，お許しください。

最初はみなさんのプリントにはない画面をご覧いただきます。

この月曜日に，土浦市立図書館の新しい図書館がオープンしました。私は今，茨城県のつくば市に住んでいいまして，土浦は隣町です。

かれこれ１０年ぐらい前からこの図書館を全く新しく建て直すことに関わってきました。東日本大震災による頓挫など紆余曲折がありましたが，面積5，１２０平米，開架２０万冊で開館しました。

この新聞記事を読み上げてみますと，「県南の商都として栄えた土浦市だが，近年は駅前から大型店の撤退が相次ぎにぎわい創出が大きな課題。新図書館は市民の知の拠点であるだけでなく，駅前活性化という新たな使命を担う。」「文化と地域活性化は，車の両輪。県内３番目に古い歴史を持つ図書館が活性化という役割を課され，２７日の船出を待つ。」「駅前に光をもたらす核となることが期待される。」と書かれています。この図では，ここが図書館です。ここに駅ビルがあり，その正面が市役所です。大型スーパーの撤退後空きビルになっていたところに２０１５年，市役所が移転してきました。

「地域活性化に寄与する図書館」は１０年前から一貫した，この図書館のキーワードでした。

もう一つ別な話です。

この写真は２００５年，新しいローマ法王を選ぶコンクラーベという会議の結果を聞きに集まった人々です。次，こちらは２０１３年の同じく新法王決定の発表を聞く人々の姿です。おわかりいただけるように，２００５年にはいわゆるガラケーで写真を撮っている人が一人ここに見えているだけですが，２０１３年はほぼ全員がスマホを持って撮影しています。２００７年にｉＰｈｏｎｅが発売され瞬く間に普及しました。わずか8年，実質は6年経たずのうちに，人々の情報入手手段が大きく変わったことが見てとれます。

以上を前振りとして，まず，図書館の不変の役割について確認しておきます。

古来より人間は，図書館を作り続けてきました。およそ今から５５００年ぐらい前，メソポタミアとエジプトとで同時に文字の使用が開始されました。それまで人間は頭の中で記憶し，話し言葉で人に伝えることで済んでいたものが，農業社会が進展し，都市国家ができると，もう話し言葉だけではコミュニケーション手段として不十分になります。頭が満杯になってしまうので，頭の中から外に記憶を出して記録を作る文字を考えつきました。記録を見れば記憶がよみがえり，昔はどうであったかを参照できます。必要な時に見る

ことができるよう多様な記録を蓄積し，提供する図書館は，人類が作りだした社会的仕組みとしての「巨人の肩」です。

１２世紀のある学者は「我々は先人よりもより多く，より遠くまで見ることができる。しかし，それは我々の視力が鋭いからでもなく，あるいは我々の背丈が高いからでもない。我々は巨人の体の上で，上に高く持ち上げられているからだ」と述べました。つまり先人たちが積み上げた知的資源の上に我々の知的活動があるということです。我々が知的活動の成果として発見したこと，考えたこと，体験したことを記録にとどめます。図書館はそれを集め，蓄積していく。同時代の人がそれを読むことで「ああそうなのか」と共有する。その結果，少しだけ進化した新しいことを考えつくというわけです。共時的に見るならば，社会における知識や情報の伝達を円滑にする「巨人の肩」です。知的資産が保存されて１００年後，２００年後の人がそれを読んで学習して，それを基に新しい知識の生産を行う。その成果がまた図書館に入ってくる。通時的に見るならば，記録資料の保存，蓄積によって世代間の文化の継承，発展に寄与する「巨人の肩」であるというわけです。このように「巨人の肩」の社会的仕組みの一つが図書館であるといえます。

次に，今日までの図書館がどのような存在であったか変遷を振り返りたいと思います。

日本における近代公共図書館の考え方は１９４５年の第二次世界大戦の敗戦によって新たにもたらされました。

その近代公共図書館のショーウィンドウとして，連合国軍最高司令官総司令部の中の民間情報教育局ＣＩＥが設置したＣＩＥ図書館がつくられました。１９５０年までに人口２０万人以上の都市に２３館が設置され，ここ仙台市にも作られました。

そこには7年間で約５０名のアメリカ人，３分の２が女性だそうですが，専門家の司書が配置され，運営やサービス，そしてカード目録の作り方等を日本人図書館員に教育しました。入場無料で手続き不要，冷暖房，座席も十分用意されている。開架式で主に英文の図書と雑誌，そして一部は貸出，レファレンスサービス，相互貸借，児童サービス，それから図書館や学校への団体貸出，さらには英会話教室や映画会，講演会等を開催ということで，海外のビジネス情報や戦争中閉ざされていたアメリカ文化を読みたい，見たいと多くの人が利用したと言われています。

１９５０年に制定された図書館法には，近代公共図書館の考え方が取り入れられます。ここで，図書館法でいう図書館とはという「定義」を確認しますと，「図書館とは，図書，記録その他必要な資料を収集し，整理し，保存して，一般公衆の利用に供し，その教養，調査研究，レクリエーション等に資することを目的とする施設」です。さまざまな考え方の図書や記録を集め，誰にでも提供して，教養の涵養，調査研究，娯楽的に使ってもらうための施設であるということです。

この制定時の図書館法では，第２０条で「国は図書館を設置する地方公共団体に対して，予算の範囲内において，図書館の施設，設備に関する経費その他必要な経費の一部を補助することができる」とされ，補助金の交付に関し必要な事項は別に定めるとされています。続いて第２１条で，「文部大臣は，前条の規定による補助金を交付する場合には，その設置する図書館が，最低の基準に達しているかを審査し，その基準に達している場合にのみ，当該補助金の交付をする」となっていました。

それを具体化した，公立社会教育施設整備費補助金交付事業が１９５１年から開始され，地方自治体が図書館施設を設置する際には，本工事費の一部を補助を受けられる事業です。この交付の要件として「館長となる者は，司書となる資格を有するものでなければな

らない」と，司書館長の必置をうたっていました。必須要件でしたので，図書館を造るには館長が司書有資格者でないと補助金をもらえないと，私が昔所属していた図書館情報大学には，毎年の夏期講習に，たくさんの方が司書資格取得に来られました。

とは言いましても，１９５０年ごろまでは，戦災からの復興が最優先の課題でしたので，図書館が新たに作られることは少なく，かつ図書館で働く専門的な職員の確保も難しいという状況にありました。実際問題として，図書館は特別な人が利用する場所であり，閉架式で館内閲覧中心でした。

私の大学の先輩が，１９５３年に東京の杉並図書館などの複数の図書館で，平日と休日に，「どこから来ましたか」，「職業は」，「何を目的に来ましたか」という来館者調査を実施しました。

割と大がかりで，４，０００人の来館者を捉えることができましたが，職業として，主婦はわずか４人でした。利用の主体は誰かと言うと，高校生，受験生並びに調べものがあるなど特殊な人でした。

平均在館時間は３時間で，朝やってきてお昼までいて，外にご飯を食べに行って，また戻って３時間ぐらいいるというのが多数です。そのための図書館ですから，机と椅子，静かな場所があればよいとされました。別に本とか雑誌とかが提供されている必要はない，というとちょっと大げさですね。

この図は，青森県の八戸市立図書館です。今，私が預からせていただいている日本図書館協会施設委員会のメンバーが，八戸市から依頼されて，新しい近代公共図書館を作りたいと設計したものです。

したがいまして，図のように，入館手続きの廃止，開架書架，レファレンスデスク，そして集会室，館外奉仕のためのステーションの設置など，新しい図書館サービス場が設けられています。しかし，市の要望を受け，さほど広くはない館内に，６人掛けのテーブルをこれだけの数並べて，１４０人以上座らせる。そして，児童室は，自習している人たちにうるさくないよう，仕切られた部屋とするということでした。

同様の例として，最高水準の図書館を標榜して，１９６１年１１月に開館した大阪市立中央図書館です。６，８６４平米に対して座席数は1，１５０席という，恐るべき数の座席が並べられています。ちょっと見にくいと思いますが，これ全部座席です。このように図書館は学生の勉強部屋でした。

高度経済成長に向かう社会の流れの中で，日本図書館協会から，図書館法でいう資料提供を貸出で行おうという考え方が提起されました。キャッチフレーズは，「買い物かごを提げて図書館へ」，「借りて帰って家で読む図書館」です。

このようなサービスを実践した１９７１年の町田市立図書館での調査では，主な利用者は主婦と子供であり，平均在館時間はわずか２０分でした。図書館に入って，何を借りようかなと巡って，手続きして出る。そこまでで２０分です。２０分ぐらいであれば，周囲がうるさくても問題ないということで，駅前などわかりやすく，人が集まりやすい場所に図書館が建てられることになりました。

代表的な例の日野市立図書館本館です。Ｌ型で，こちらは成人こちらが児童です。成人エリアの図を見ていただくと，先ほどのような机と椅子は全くありません。館内はこのような感じで，窓際にソファがあり，雑誌が置いてあって読んでいる人がいます。書架にはたくさんの本が並んでいる。奥に進んでも机と椅子のセットはなくスツールのみです。

まさに借りて帰って家で読む図書館です。

このような図書館が全国で大いに支持されました。１９７０年以降の高度経済成長期，貸出図書館を我が町にも我が市にもと，急速に整備されました。それに伴って貸出冊数も伸びていくこととなります。

高度経済成長を経て１９８０年代の半ば，豊かな社会が到来し，自治体財政も豊かになりました。人々の生活での大きな変化は，自家用車の普及であり，雑誌種数の増加，ビデオが普及するなどです。図書館も単に館数の増加ではなく，一つのまちの中に複数の図書館が作られる。コンピュータを用いた貸出返却システムが本格的に普及して，購入する本を発注すれば，コンピュータ用データとともに装備済みで届く，資料選択から納入までの外部委託システムが成長してきます。ますます貸出業務が簡単になりました。

また，利用者は自家用車で自分の好きな図書館に行くことができますから，大きな建物，広い駐車場の得られる場所に，何でもあり型の図書館をつくって遠くからでも利用者を集めるということで，一つの建物に数種類の施設が入る複合施設が作られるようになりました。

１９８０年代までは，複合施設には分館が入るのが定番でしたが，１９９０年代になりますと，本館も複合施設の中に作られるようになりました。

これは１９８７年開館の埼玉県朝霞市立図書館です。図でおわかりのように，日野の図書館に比べるとずっとごちゃごちゃとしています。ごちゃごちゃしているということは，いろんなものがあるということです。

これは休日のお昼ごろですが，家族そろって図書館から帰るところです。お父さんとお母さんは図書館バッグを提げて，二人の子供は紙芝居を一つずつ小脇に抱えて，駐車場に向かっていくところです。これから，ファミリーレストランでご飯を食べて帰ろうというパターンですね。

中に入りますと，まだカードカタログがある時代ですが，見通しはよくて，何がどこにあるかが見渡せます。ここには雑誌，そしてこの辺がビデオ観賞のスペースです。一言余計なことを申し上げると，ご覧のように，ここに映っているのは男性ばかりです。その当時の男性利用者の多くは，運転手として来館していますので，雑誌とか新聞を読みながら，母親と子供が本を選ぶのを待っているのです。調べもののための社会人席，若者のためのティーンズコーナー，ガラスで囲まれた静かな読書室，それから児童スペースです。

別の図書館ですが，ここはソファベンチですね。この植え込みの向こうに見えているのが，畳敷きの部屋です。その隣には８人掛けのテーブル席，そしてここは，今日はどちらを借りていくかなと拾い読みをするためのスペース。そして，ここに扉があり外で読む屋外読書のスペースです。「今日はこういう目的で来たからここを使おう」というのが選べて，長くいようと思えば長くいられる図書館です。

そのほか，公共図書館にも個室が設けられるようになりました。これはグループ学習室です。

この写真は，佐賀県伊万里市民図書館のグループ活動室です。例えば陶芸のグループが書棚から名人の作品集を持ってきて，この部屋で作ることができます。このような市民グループが，活動の成果を図書館に陳列すると，幅広い年齢層の人が来館しますから，たくさんの人に見てもらえるということで，展示スペースも設けられる例が増えました。

以上，日本の公共図書館の推移をまとめますと，６０年代半ばまでは学生の勉強部屋で，静かな場所に机と椅子が並ぶ図書館。６０年代半ばから８０年代半ばぐらいまでは貸出型図書館で，借りて帰って家で読んでもらう図書館。それが８０年代以降，長時間在館型といって，基本となるサービスは貸出ですが，大規模で何でもあり型の図書館がつくられてきました。日本図書館協会のリードもあり，多くの図書館がおおむね同じ方向を向いてやってきたといえます。

これが２０００年以降のいわゆるデジタル情報時代において，どういう方向を向いていくべきかは，みなさん関心を持っておられるところであろうと思います。

先に結論を申し上げると，もう，全体が何か一つの同じ方向を向くということはない。それぞれの図書館が個性を持ち，それぞれの狙いを持って図書館活動をしていく時期に来ているといえます。ここに何々時代というのをもう挙げることができない，挙げるべきでもない，そういう時代です。

それではここから，図書館を取りまく環境の変化について，五項を順に挙げて説明します。

その第一は，バブルの崩壊後の国家及び自治体財政の逼迫です。１９９０年代初めにバブルが崩壊し，国も自治体も大幅な税収減にみまわれました。それもあって地方分権，規制改革が提唱され，補助金から交付金方式に変わります。補助金は，特定の事業のために国が財政援助をするものですが，交付金は，特定の目的を持って交付する金銭を広く指す言葉です。計画に位置づけられた事業全体に対して補助するもので，当該計画内の事業間，年度間での流用は可能となっています。先ほど挙げた公立社会教育施設整備費補助事業も１９９７年度末をもって廃止になりました。その間，合計で９００を超える図書館がこの事業で図書館建設費の一部を援助してもらっています。つまり，これら９００の図書館では，少なくとも新築開館時には司書資格をもつ館長がいる状況であったわけです。

ここで，昨今の図書館設置数の推移を見ていただきます。このグラフは建築工事を伴った図書館設置を，『図書館年鑑』の各年版をもとに作成したものです。２０００年以降でも，毎年，合計で５０館ぐらいが作られ続けていることが分かります。

その内訳を種別に見ていただくと，場所を移るか移らないかはともかくとして，本館をもう一度作り直すが，直近では一番多くの数となっています。続いて，地域館・分館の更新です。すなわち本館，分館とも更新，建替えが主体です。ちなみに，建替える前の建物がどのくらいの年数であったかというのを見ますと，早いもので３０年程度，長いもので５０年ぐらいです。

建て直しの理由を，建築計画書などから見ますと，まず老朽化，狭隘化が挙げられています。次いでデジタル社会の図書館サービスの場にふさわしくない，これが図書館的な理由の主要な二つです。加えて，多様化する市民ニーズに対応できないとか，地域の再活性化や住民相互のふれあいの場を作りたい，子育て支援に貢献できる図書館を作るべきなどが挙げられています。

そして，駅前や中心市街地，市役所の隣接地に立地させる事例が増えています。とくに駅前図書館の増加は顕著です。愛知県の一宮市の図書館はまさに駅ビル内ですし，冒頭に話した土浦市も駅横のビルです。それから，いわゆるシャッター通りになってしまった中心市街地ににぎわいを戻そうと，中心市街地に図書館を移転させる例もたくさんあります。例えば静岡県島田市では，中心市街地の商業施設ビルを市が購入して図書館として改修しています。これは土浦市の市役所と同じ発想です。市役所隣接地というのは，防災拠点的な考え方が含まれていますし，市役所の駐車場が土曜日曜には空いているので，そこに立地するのは好都合だということもあります。先に述べたように複合施設図書館もますます多様化が進行していますが，池田小学校事件以来あまり実施例のなかった，学校の中に公共図書館を作ることも復活してきています。

いずれにしても，大規模かつ多機能化して建替えるということが増えているのですが，税収減の自治体はお金が足りませんから，建設資金は交付金の獲得が頼りという状況になっています。

２０１５年中に開館した図書館が得た主な交付金を見ていただきますと，一番多いのは，国土交通省の社会資本整備総合交付金です。昔，まちづくり交付金と言ったものです。それから，がんばる地域交付金とか，地域活性化事業債，合併特例債。それから日本図書館

協会も活動して図書館にも適用されることになった過疎債です。このほかでは，住民生活に光を注ぐ交付金によってかなりの数の図書館が作られました。ここ数年増えているのは，森林・林業再生基盤づくり交付金など林野庁系です。

最多例の社会資本整備総合交付金は，国土交通省所管の地方公共団体に向け個別補助金を一つの交付金に一括したもので，地方公共団体にとって自由度が高く創意工夫が生かせる交付金として，平成２２年度に創設されました。

この交付金の目的は，「都市再生特別措置法に基づき，地方公共団体等が行う社会資本の整備，その他の取り組みを支援することにより，交通の安全の確保その円滑化，経済基盤の強化，生活環境の保全，都市環境の改善及び国土の保全と開発並びに，住生活の安定の確保及び向上を図る」とされています。図書館の施設更新は，この部分，住生活の安定の確保及び向上を図るさまざまな施策の中の一つとして組み込まれることになります。交付金獲得のためには，図書館の整備計画を社会資本の整備とか，地域活性化という全体フレームの中に適合させなければなりません。つまり，まちづくりとか，都市再整備，にぎわい創出，地域活性化，防災拠点形成，地域振興などの交付金キーワードに図書館の備えるべき機能を整合させ，図書館を作ることによってまちづくりや都市再生，にぎわい創出に寄与するというストーリーを組み上げる必要があるというわけです。

多様な複数の施策をどのように構築すれば交付金が得られやすいかや，新設された交付金はどんなことを狙っているのかといった，交付金についての情報収集，交付金獲得のための企画は，首長部局の仕事として行われています。その結果として，私も現在いくつかの図書館整備に関係していますが，その多くは首長部局主導で勧められています。

このような状況も強く関連していると思いますが，ここ数年で，図書館を教育委員会内に位置づけない自治体が大幅に増えてきています。２００８年の地方教育行政法の改正により，条例によって，文化とスポーツに関する行政事務を，首長部局の所管とすることができるようになりました。社会教育調査によりますと，２００８年では，わずかに2県，市区で3，町で1でありましたものが，２０１１年には3県，９９市区，4町，２０１５年には4県，１２６市区，6町と増えてきています。教育委員会の所管であるべき図書館法に基づいて設置した図書館を，文化施設と位置づけ，教育委員会の権限に属する事務の補助執行に関する条例などを定めて，首長部局に置くものです。東京都区部では千代田区，豊島区，足立区，荒川区，江戸川区が，都下の府中市もそうです。また，開館当初からこの形を取っていた愛知県図書館は県民生活部文化芸術課の所管です。三重県立図書館は環境生活部。奈良県立図書情報館は，地域振興部文化振興課に所管されています。図で書くとこのようになります。

続いて，取り巻く環境の変化の第二は，インターネット社会の進展です。パソコンや携帯端末の普及によって，時間と距離を超越したマルチメディア情報の流通が展開されていますが，私は最も大きな変化は，情報受発信のセルフ化であると考えています。これまで，自分が見つけたこと考えたことを，他の人に伝える情報発信に関しては，多くの人は友達に話し言葉で伝えるのが限界でした。新聞や雑誌に記事を書ける，本を書くことができる人は特殊な人でした。しかし，現在では，多くの人々がブログを開設して頻繁に発信しています。それは発信のセルフ化です。

受信のセルフ化は，例えば，どの図書館も世界の全ての本を集めているわけではありません。利用者は図書館によって選択されたものから選んでいるのです。その意味では，情報の受信もある程度セレクトされた

ものを受けるのが精いっぱいでした。インターネットによって，誰でも世界中から好きなものを探し出して読めるようになってきました。もちろん全てではありませんが。

また，知識やデータ，ノウハウが価値を持つ知識社会がつくりだされました。ビックデータなどという言葉が喧伝されているのは，ご存知のとおりです。この知識社会は，自己判断，自己責任の時代です。自身で情報を集め，それに基づいて自分で決め，自分で責任を取るということですから，情報取得能力によっては，損する人が出てくることが危惧されています。

インターネット社会については，１９８０年に刊行されたアルビン・トフラーの「第三の波」という書があります。人類が体験した第一の波は農業の開始，第二の波は産業革命，第三の波が情報革命とされます。これを受けて，カリフォルニア州立大学のランカスター教授は彼の書で，これからはコンピュータで結ばれたペーパーレス社会が到来する。図書館は古来より知識伝達の場とであった，知識を伝える手段が紙の本であったから，本の並ぶ図書館が作られてきた。ペーパーレスとなる２０００年には，利用者はもはや図書館に行く必要はなくなる。物理的な本と，本が並ぶ図書館はなくなっているだろうと，５年おきの予測図を描いて示しました。物理的な図書と図書館は絶滅危惧種とされたわけで，関係者に大きな衝撃を与えた書でした。

実際には，私が筑波大学の附属図書館長になった２００４年ごろから，科学，工学，医学領域の学術雑誌の多くは電子ジャーナル化され，自宅や研究室からでも閲覧できますから，教員や学生は，学術雑誌を見るために図書館に来る必要はなくなりました。図書館では，冊子体の学術雑誌を買うことをやめ，学術雑誌が並ぶスペースは姿を消しました。ランカスター教授の予測が一部当たったといえます。

電子図書館を模式化するとこのようになります。

自宅からでも携帯端末からでも，もちろん館内のＰＣからでもアクセスして，利用者であると認定されると契約先のデータベース，電子ジャーナルなどを閲覧でき，必要なものをダウンロードできる。図書館はコンテンツの購入契約をしますが，正確にはアクセス権の購入です。

図に示しましたように，ペーパーレス電子図書館を右に，対極に印刷資料だけの図書館を置くと，これからの図書館像は，両者の間に位置づけられるハイブリットライブラリー，混合図書館であるといえます。相当程度ペーパーレス図書館に近い館もあれば，逆に，紙図書館に近いものも存在することになりましょう。

変化の第三は，少子高齢化の進行です。

母と子供が利用者の主体であった図書館から，成人，高齢者，特に男性高齢者の図書館になっているのは，みなさんが実感されているところでありましょう。だからこその子育てサービスの重視，子育て支援も強調されています。子育て支援に熱心な市には，若い世帯が引っ越してくる。そして地域が活性化するというストーリーです。例えば，本日ご参加の佐賀県基山町では，若年世帯の定住促進を主要施策に据えておられ、図書館もそれへの寄与が求められています。

第四に，平成の大合併です。明治の大合併，昭和の大合併と経て，平成の大合併で３，２３２あった自治体が１，７２７になっています。合併した新しい市における新たなコミュニティづくりが課題です。それには，社会教育と社会教育施設の役割が大きいといえます。また，合併前の庁舎施設が余っている状況があります。先ほど町村において図書館設置が増えている図を見てもらいましたが，合併前の役場庁舎を改修して図書館を設置した事例はたくさんあります。

第五は，出版不況です。「出版状況クロニクル」に基づき，出版社売上額の前年度比を表にしてみますと，

２００４年から２０１０年までずっとマイナスです。実は，もっと前から続いています。

こういう中にあって，図書館が貸出サービスのみに突出しているのではないかと批判されています。つい先日の全国図書館大会においても，某出版社の方の文庫本の貸出云々という発言が話題になりました。

自治体財政の逼迫を受け，１９９３年をピークに資料購入費は削減の一途です。そして，１９９８年をピークに専任の正規職員の数も減り続けている状況です，にもかかわらず貸出冊数だけは伸び続けています。「貸出」は一番わかりやすい，数値目標化しやすい指標ということで伸び続けている。２００９年の個人貸出し冊数は約７億冊で，１９９３年の２．１倍です。

長引く出版不況と貸出冊数の伸びとを根拠に，１９９７年ごろから，ベストセラーの複本を多数備えて貸し出す図書館は，無料貸本屋ではないかとの批判がなされています。慶応義塾大学の林教授は，「図書館は無料貸本屋か」を文芸春秋に，出版人の能勢氏は，「増加一途の図書館貸出冊数ー書籍販売の伸びおびやかす一要因」，小説家の楡周平さんは，「図書館栄えて物書き滅ぶ」を書いておられます。このように，図書館が貸出だけに力を入れていくのは，社会的にもう容認されないと言えます。

オランダの図書館では，１９９０年代に国家財政の逼迫を受け，サービスの削減すなわち，図書館の数を大きく減らす，開館時間を短縮する，コレクションや職員数を削減する，職員の育成を放置するなどを行ってきました。そのため，２０００年以降の情報技術の広範な普及によって，図書館の存在感が希薄になる→利用者が減る→社会的な支援を失うという悪循環に陥りました。日本でもサービス基盤の縮減がこのまま進めば，一部の図書館はオランダと同じ道を歩んでしまうのではないか，危機感を持つべきであると申し上げておきたいと思います。

公共図書館をもっと効果的，効率的な体制にするとか，存在感がある図書館，要するに社会的支援を得られる図書館にすることが，図書館界の今の課題であると言えます。

以上の五つの変化に加えて，ごく近年のことで，図書館に大きな変化をもたらすと思われることを一つ挙げます。

ご参加の多くのみなさんが，既に指示を受けていることと思いますが，公共施設等総合管理計画の策定が，全ての自治体に求められています。２０１２年１２月に中央道笹子トンネルで天井板崩落事故が起こりました。その原因は，トンネルが老朽化していたことに加え，保守，管理が不適切であったと道路会社が有罪となっていますが，これを契機に浮上した課題です。

日本の社会資本整備は，１９６０年から８０年の高度経済成長期に集中的に行われたことから，現在一斉に大規模な改修，建替え，更新の時期を迎えています。先程の図で見ていただいたように，図書館でも，今の流れは建替えです。それに至らなくても，空調設備や内外装材の更新など大規模な改修を迫られています。自治体の税収減が進行する一方で，この増大化する公共施設維持・更新の財政負担をどうするかが，多くの自治体にとって喫緊の課題となってきています。

２０１４年４月に総務省が自治体に，「公共施設等総合管理計画を策定せよ」と，指針を提示して，比較的短い年限内の策定を要請しました。この公共施設等とは「公共施設，公用施設，その他当該地方公共団体が所有する建築物その他の工作物」で，市民生活に関わるあらゆるものです。公共施設マネジメント計画とも呼ばれていますが，地方公共団体が所有する公共施設の老朽化に対応して，安全・安心かつ持続的に公共施設を維持・更新するための取り組み計画案の策定を求めています。

「公共施設の総合的な管理による老朽化対策等の推

進」と題して総務省が作成したプリントを見ていただきます。日本の公共施設は，左図のように数が増えているのですが，７０年代から８０年代の上り方が顕著です。右の図は，社会保障関連費と公債費の増加のため，公共施設の新設・維持・改良のための経費である普通建設事業費が削減され続けていることを示しています。前二者の増加は続くことになりますから，公共施設の維持費は削減され続けるだろうというわけです。

本計画の策定で先行している，埼玉県のさいたま市では，このような図で市民に，抑制型の公共施設マネジメント計画の必要性を訴えています。まず右では，総延床面積２６０万平米の公共施設のうち，建築後３０年以上の施設が５２％であること，面積比率では５１．４％が学校であることを示しています。次に，この図は，今後の対応策として，学校の建替時には公民館，コミュニティセンター，福祉施設などを加えた複合施設として整備する案を提示しています。また右にありますが，さいたま市では「ハコモノ三原則」なるものを定めています。すなわち，①新しい施設は原則としてつくらない。②今持っている施設を建替える際には複合化を検討する。③今持っている施設の床面積を今後４０年間で１５％程度減らすという内容です。これをまとめたものがこの図です。

税収減の一方で，社会保障関係費用が増大する，公共施設の維持，更新費用が膨張するのを，どうするか問われているのが公共施設等総合管理計画の策定です。その一例がさいたま市の「ハコモノ三原則」です。

もう一度戻っていただくと，学校というのは，地域の核として，どうしてもある程度の数が必要ですから，今後も維持・更新され続けられるものと考えられます。一方，地域のコミュニティ活動の拠点施設の類では，住民から一番支持があるのは図書館です。ということで，図書館の中に公民館的機能，福祉施設的機能，子育て支援施設的機能，この全てをまとめた図書館，今後は，この広い意味での図書館と学校の複合施設が，公共施設として作られ続けていくことになるであろうと私は考えています。単一機能複数施設の時代から複合機能の少数の建物を建てていく時代に転換したということです。

関連して，コンパクトシティという言葉が各所で論じられています。市域，町域の拡大期には，人口分布が周辺にまで広がり，行政サービスの負担を増大化させました。少子高齢化の進む地域では，市域を狭くしていかないと，道路や橋を含めた公共施設の維持・更新費を負担できなくなります。もう一つの目的は，空洞化した中心部に活気を取り戻す。商業地や行政サービス，防災拠点といった生活に必要な機能を一定範囲に集めて，効率的な生活・行政を目指すというものです。先ほど見ていただいた土浦市も，市役所と図書館とを駅ビルを中心に隣接させました。これによってコンパクトシティ化の核拠点が形成されました。

もう一度オランダの教訓を見ていただきます。図書館の存在感が希薄になる。利用者が減少する。社会的な支援を失うという悪循環です。これを避けるためには，いかに市民の間に存在感のある図書館になるかが求められています。本日の標題である「図書館の多様化する社会的役割」は，この存在感のある図書館になることが求められているという結論に帰着できると申せます。

存在感のある図書館といえば，私が入れ込んでいる北欧の図書館を例に挙げさせていただきます。広大な国土に少数の人口が分散しているため，一般的な地方都市では，公共施設は図書館しかありません。図書館は資料と情報提供の場であり，コミュニティのサロンです。そして，世界的に見れば少数言語の出版文化を支えているのが図書館です。

それから今，北欧だけではありませんが，ヨーロッパ全体に移民に対する問題が強く関心を集めています

が，移民をいかにうまく社会の中に溶け込ませるか，社会的包摂のための機関として図書館が機能しています。

まずこれは，館内に，たくさんの国とか，市とか各種機関の広報が掲示されている様子です。この写真は，図書館の中にある，日本でいうところの消費者センターのようなものです。車を買う際にホンダとトヨタの差はなどの相談に乗ってくれる窓口です。

この写真はドレスデンのヤングアダルト図書館です。この人は図書館員ではなく市の若者担当のお悩み相談員です。お悩み相談員が館内に専用デスクをもっていて，青少年の悩みなどについて相談に乗ってくれる場所です。

これは夏季に，書棚を動かして，高校生がミニコンサートを開いているところであり，これは日本でいうアフタースクールです。ボランティアが鍵っ子を集めて絵画教室をやっているところです。これも図書館の中。図書館の中庭で営業している誰もが入ってこられるレストランです。失業者や若者たちがこういう場所で働きながら就業の機会を探しています。これは，移民の若者とか，リタイヤした高齢者たちが図書館でチェスをするなど，たまり場になっている様子であり，ベビーカーと共に来館してネットサーフィンしている主婦の姿などです。そして，静かな学習室も設けられています。

移民の市民化のために，どのような活動をしているかをノルウェイの図書館を例に見ていただくと，言葉の習得のために語学講座，言語カフェ，読書サークルの開催，学習テープの提供などをしています。出身国との継続的な接触による心の安定のために，母国語の雑誌・新聞の提供，インターネットでブラウジングできるパソコンが自由に使用できます。それから，ＩＴ技術を学ぶ。市役所に何か登録などの場合にも申請用紙というものはなく，インターネット経由でないといけない。言葉とパソコンが不自由な移民にそれを修得させることで，市民生活の基本を確保させることはもとより，就業や就学につなげる。それから，知人や友人と集いおしゃべりする場所として図書館が使われています。

アムステルダム市立図書館が，２００８年の新館建設時に計画に盛り込んだのが，この６項目です。１番，２番は誰もが納得いただくところですが，３以降の，独立したホール，展示スペース，多くの飲食施設，館内をあちこち歩き回るとか，長くここにいようと思わせる仕掛けという４項目からは，これまでの図書館とは明らかに違う方向を目指していることがおわかりいただけると思います。

ではあと５分で実例を挙げます。

これは，栃木県の茂木町まちなか文化交流館ふみの森もてぎです。廃業した酒蔵や病院の跡地を町が買収して，そこに市民ふれあいの場所を，図書館を核として作りました。この辺が展示スペースとか市民の集まる場所，これが図書館です。これが図書館の入り口で，入った左に雑誌が並んでおりまして，ここに雑誌を持ち込めるカフェがあります。

今日，南魚沼の方がおられるから直接ご説明いただくほうがよいのですが，既存の他用途施設を再活用した南魚沼市図書館えきまえ本の杜です。私ここは大変すばらしい図書館だと高く評価しています。ここが市役所でその前に防災広場，駅前広場，ＪＲ六日町駅，そしてこれが図書館を含む複合施設です。古いスーパーマーケットを改修して，外観はこのようにきれいにしました。建物内には，内科と整形外科のクリニック，生鮮食品のマーケット，そのほかいくつかの専門店が入っています。市役所，防災拠点，駅前広場，駅，そしてクリニックと図書館，生鮮食料品。これぞまさしくコンパクトシティの一つの姿といえます。館内は，こんな感じで，あまり見慣れない書架レイアウトです。

とても居心地の良いすてきな図書館です。

最後に，これは長野県の小諸市です。ここに市庁舎があり，図書館，病院，そして広場です。一体を同じ設計者が設計して整備が進められています。

定められた時刻になりました。ご清聴ありがとうございました。

＜事例発表①＞

まちのにぎわいや交流を創る図書館

伊丹市立図書館「ことば蔵」
館長　綾野　昌幸　氏

みなさんこんにちは。

兵庫県伊丹市というところから来ましたので自分が一番遠いかなと思っていたら，鹿児島とか北海道とか全国からお越しいただきましてありがとうございます。

名簿のほうを拝見しますと，自分が既に呼ばれて行ったところがあったりするんで，ちょっとハードルが高いなと思いながらしゃべらせていただきたいと思います。

タイトルにある「まちのにぎわいや交流を創る図書館」その図書館のところに無限大のマークをつけているんですけど，これは実はこの間，うちのシステムは富士通なんですけど，富士通さんの研修会に呼ばれて行ったときに，富士通ってＪとＩのところに無限大の可能性みたいなロゴがあったので，図書館も結構無限の可能性があるなと思って，もちろん富士通には断りましたけど，使わせてねということで使わせていただいてます。

そんな感じで，「まちのにぎわいや交流を創る図書館」ということで，実は，私，この４月から館長になったんですけど，図書館には５年，６年ぐらい関わっています。館長になってから特に無限の可能性があるなと思ったんでこれを使わせていただいています。

簡単に自己紹介させていただきたいと思いますが，実は私あまり図書館っぽくないし，ましてや館長をするというようなタイプではないので，ちょっと変わった経歴のやつと思ってください。

これまでの歩みということで，私，市の職員なんでいろんな職場を転々としています。人事やら企画やら商工やら市民税やらいろんなとこにいました。一つの最近の中心の仕事としまして，２００５年から中心市街地の活性化というところを担当しています。２０１１年９月に教育委員会と併任です。市長部局と教育委員会と両方とも兼ねているということで，そのころからずっと兼務をしています。そういう市長部局，教育委員会という任命権者が違うところで仕事をしていると，机とパソコンがどっちにもあるんですね。市役所にもあるし，図書館にもあるというような感じで行ったり来たりで仕事をしています。教育委員会のほうは，図書館の仕事をさせていただいています。

今日は，資料として２３ページにちょっと新聞記事をつけさせていただいております。この「ことば蔵全国から注目」という記事で，ずっとことば蔵を追ってくださっていた記者の方なんですけど，縦書きの本文の２段目ぐらいに藤原保幸市長は…みたいに書いていますが，実はことば蔵というこの新しい図書館，５年前ですので新しいと言えるかどうかわかりませんけれど，この図書館になったときに市長の思いがありまして，広く利用してもらうために今までにない図書館を目指したと。私，ずっとまちづくりをやっていまして，その職員をことば蔵と併任にしたという形ですので，実は私，図書館も利用していなかった側の人間なんですけど，そのころから図書館に関わるようになったと

いうことでございます。

経産省のほうの街元気のサイトというのがありまして，元々商業の活性化とか中心市街地の活性化を担当していましたので，経産省寄りの仕事をしていたんですけど，中心市街地の活性化のネットワークの会長をしていたこともありますし，本も２冊，恐縮ですが書かせていただいいたことがあります。いずれもまちづくりの本です。中心市街地活性化基本計画なんかを策定していろんなイベントをやってきたというような経歴です。「まちなかバル」とか「ちょこリンピック」とか，こういうお酒のイベントであったり，うちはベルギーのハッセルト市と姉妹都市なんですね。なので，チョコレートのイベントはいろいろやっています。

一番下に書いていますけど，新図書館のことば蔵事業っていうのを担当しました。

このことば蔵っていうところを説明させていただきたいと思いますが，地上４階建てで地下１階の建物なんですね。１階正面玄関から入りますと，全然書架がない，図書館っぽくない図書館です。椅子と机があって，子供たちとか大人が思い思いしゃべっていたり，ご飯食べていたり，お茶飲んでいたり，そういうようなスペースが１階です。２階が児童書。３階が一般書。４階が学習室。地下１階に多目的のホールがあります。大雑把に言うとそういうような施設です。

実はこの図書館ができたところなんですけど，以前は酒蔵がありまして，「剣菱」という銘柄のお酒を作っていた酒蔵があったところで，図書館が新しく移転整備されるというときに，愛称を募集しましたところ，ことば蔵というのが出てきましたので，非常にいいじゃないかということで採用され，ことば蔵というのが愛称です。

このことば蔵のコンセプトなんですが，伊丹市立の中央図書館っていうのがずっと郊外にあったんです。それが中心市街地のほうに移ってくるということもありまして，今までのそういう貸本だけの図書館ではいけない，いろんな事業をやっていこうということで建設のコンセプトというのを建設の段階で作っています。図書館本館機能，交流機能，情報発信機能，この三つの機能を持たせて，誰もが気軽に訪れて交流できる公園のような図書館，こういうコンセプトを決めていったんですね。

私もまちづくりをやっていたんで，その図書館を作るときに計画の策定委員みたいな感じで入っていたんですが，公園のような図書館と決めて，これ大変だなと，これ誰がやるんだろうと思っていたんです。まさか自分がそれをやることになると当時思いませんでして，コンセプトを決めて中心市街地に移ったというときに自分がその交流事業の担当ということになりました。

公園のような図書館と一言で言っても，実際どんなんだろうと。公園と図書館って一見相反しますよね。公園ってこうにぎやかな，子供たちが遊び回っているようなイメージ。図書館って，やっぱり大体は静かにみなさんが本を借りて読んでおられるというようなイメージがあるんで，自分もその委員として参画しながら実際難しいなあと思っていました。

ルールなんですけど，やっぱり社会教育施設ですので，一定の制約はあります。制約は決めておいて，あとは走りながら考えていこうということにしました。これはどういうふうにやっていったかというと，市民の方と一緒にルール作りしていくんですね。開館してから，例えば１階フロアでは何しようか，どうしよう，と。１階は先ほど言いましたように書架がないところです。飲食はどうしようかなって。最初はやっぱり，行儀が悪かったりしたらごみも出るし，においもきついもの食べたりしたらなかなか厳しいなというようなことを言っていたんですけど，１階のフロア全面じゃなくて半分だけいいようにしようかなとしたところ，

まあまあお行儀よくみなさんごみも持ち帰ってくれるし，そんなににおいのきついものを食べるというようなこともなかったんで，今は全面オープンに食べられるようにしています。そういうような感じで一定の制約は決めますけども，あとはもう自由に，ゆるい方向で考えていこうとしました。

肝心の交流事業ですね，自分は外のイベント，例えば広場とかホールでのイベントはやってきましたけれど，こういう図書館の１階の，交流フロアって言うんですけど，そこのスペースでそういうことをやったことがない。まして，図書館にそんなに行かなかった人間なんで，交流事業をどうしようかと。まあ，自分が行かなかったんで，自分は一つのターゲットだなと思いました。こういう現役世代の人間が図書館に行くという。そういう，自分のおもしろいと思ったことをやれば人が来るんじゃないかと思ったのと，あとはやっぱりまちづくりをずっと市民の方とやってきましたので，市民の方と一緒に考えるというところで，交流事業を決めていきました。

改めてその伊丹の特徴を生かしたまちづくりをしていくということで，ほかのまちではなかなかできなくて，伊丹らしくて，市民の方が望むこと，楽しいことってなんだろうと改めて考えたときに，特徴としては，清酒発祥の地っていうところと，ことば文化都市という特区を取っています，そういうところを生かしていかなきゃと。あと，市民力が強かったので強い市民力。先ほど先生の話にもありましたけど，うちも公共施設マネジメント計画というのを作っています。結構いろんなものを作ってきたので，ホールとかイベント広場が多い。それはそれで強みだと思って，そのあたりを生かしていこうと考えました。

ことば蔵の特色ある事業ということで，小泉政権時代に，読む，書く，話す，聞く，「ことば文化都市伊丹」という特区を取りました。やっぱり，図書館ですので自分が今まで外でやってきたお酒のイベントとかチョコレートのイベントをそのまま当てはめるわけにもいかないと。この特区の読む，書く，話す，聞くっていうところは注意しながらやっていかないとということで，読む，書く，話す，聞く，これにこだわったイベントをしています。

そして市民力ですね。市民の方はすごいまちづくりに参加するの好きで。まあ，伊丹って狭いまちなんですね。面積が５キロ四方で２５平方キロメートル。そこに２０万人の方が住まれているということで，人口密度がちょっと多くて，山もなく海にも面してないというところです。今の人口は，マンションがたくさんできつつあるので，微増しているというようなところです。

市民力はすごい強いところなんで，じゃあ一緒に考えていこうということで，運営会議というのを持ちました。ことば蔵は２０１２年7月１日に開館したんですけど，私はその１０カ月前，２０１１年の9月１日に併任の辞令をもらったんですね。教育委員会の辞令をもらって，さあどうしようかと。やっぱり市民の方と一緒に考えていかなきゃと。もちろん自分も考えなきゃいけないけど，一緒に考えていかなきゃと肝に据える運営会議というのを一つ持ちました。もう一つ，やっぱりちょっと不安なところもあったんで，コアメンバーですね，自分が一緒にまちづくりをやっていた強力なメンバーっていうのをコアに据えて，裏側でコアメンバー会議というのもやっていました。そしてプレイベントをやりながら開館を迎えるというような感じになったんですね。

運営会議っていうのは誰でも自由に参加できるっていうシステムにしてましたので，ちょっと不安があったのでコアメンバー会議というのを裏でやりながら運営会議を上手に回していくという感じでやってたんですけど，もう今は，コアメンバーも開館して１年くら

いで消滅していて，運営会議のみずっと続けています。

この運営会議っていいますのは，市民の方と図書館職員でやりたいことを協議する場です。今，毎月第一水曜日の１８時半から開催。私どもの伊丹市立図書館は平日は２０時まで開館していますので，第一水曜日の１８時半から１時間半の時間で運営会議というのをやります。毎回新しい方が来られるので，自己紹介をします。前月の振り返り，前月以降に実施されたイベントでこんなことやりましたというのを紹介します。あと，たまにことば蔵の職員の悩み相談があったり。そしてメインがやりたいこと発表会ということで，じゃあ今日の運営会議でやりたいことの企画持ってきた人いますかって手を挙げてもらうんですね。大概３人か４人は手を挙げてくださいます。そのような感じで１時間半をうまいこと割り振っていって進めていくという感じです。

開館前からこの運営会議っていうのをやっていると言いましたけど，こんな感じですね。これは，ことば蔵じゃなくて近くの公共施設です。このときは，いろんな団体の長であるとか，ＮＰＯの方とか，まちづくりの関係の方とか，個人の方，商売人とかいろいろ来ていただきました。これは，最初はお声がけしました。開館前はお声がけして，今度ことば蔵でこういうスペースができますと，そこで，あなた方どんなことをやりたいですか，やってもらえますか，みたいなことを聞いていく場にしました。そこでだんだんと，お声がけしてなかった人も，もちろん広報とか，ホームページでフリーに参加を呼びかけていましたので，参加していただくというような形になってきました。これは開館前です。

開館後はこんな感じですね。これは，ことば蔵のまさしく交流フロアです。ここで何かやりたいことありませんかということを聞くんですね。これは一人の方が，「やりたいことあります」って言って企画を持ってきて，みんなで話を聞きながらその企画書を見ているという場面です。こんな感じで運営会議を今，やっています。ぞくぞくと市民企画というのができてきています。

いくつか，本当に一部なんですけど紹介させていただきますが，一つは，「英語で子育て交流会」。これは開館のときから毎月やっているんですね。開館のときにも運営会議に来られて，「最近伊丹に越して来て，ママ友がいない」と。もちろんそうですね，越してきたばっかりなんで。「ママ友作りたい」と。「自分は留学したこともあるから英語を教えるぐらいの知識はある」ということで，「子供さんを対象に英語を教えたい，そういうイベントをしたい」と。そうして周りからいろいろ，「こういうふうにしたらいいじゃないか」と言ってでき上がったのが「英語で子育て交流会」ということで，これは，平日の昼間にやっています。多いときには１００人ぐらい来られるようなイベントになっていまして，もちろんたくさんのママ友ができました。ずっと続けていて好評なイベントということで一つご紹介させていただきます。

これはさっき運営会議で発表されていた方なんですけど，この方も英語なんですが，実はこの方，英語の教師をされていました。で，今はリタイヤされて，退職してもみんなに英語を教えたいということを運営会議でおっしゃって，教えていただいたのがこれで，「コトバーシティ」というのがこのご本人さんがつけた造語です。ことば蔵の「ことば」それから，ユニバーシティですね。それを合わせた言葉を造って，日本文学を英語でということで，例えば，夏目漱石の「坊ちゃん」をわかりやすく英語で「私ならこう訳す」と，いろんな英訳を紹介していっている，すごいわかりやすく教えてくださっている英語の教室です。

これは，短歌の先生がいまして，この方が宮内庁の歌会始ってありますよね，それに真剣に「この伊丹の

中から誰か行こうや」みたいなこと言い出して，短歌を教えてくださっているんです。何回か歌会始の時期の前に教えていただいて，みんな真剣に短歌を作っています。今でもまだ，なかなか歌会始に行けたという実績はありませんが，こういうような遊び感覚でもちょっと目標を持ってやっているというのもあります。

これは今年から始めたんですけど，スクラッチデイ２０１７ｉｎ伊丹ということで，スクラッチという子供向けのプログラミング言語がありまして，教えてくださっているのはＳＥさんです。現役のＳＥさんが教えてくださって，自分も子育てしているんで，子供向けにいろんなプログラムを教えたい，ということで，祝日の日にやりました。これは，一日中やりまして，延べ３００人から４００人ぐらいお子さまが来てくださったというイベントになりましたが，いろんなブースも作ったりして，ロボットを動かせるようなプログラムを教えようみたいなところとか，バーチャルリアリティですね，ＶＲを使ったりしているコーナーもあったり。現役のＳＥさんが運営会議に来て「私，こんなことやりたい」っておっしゃったイベントです。

もう一つこれがおもしろいのが，この尺八を吹いている方が運営会議で提案されたんですけど，「私，邦楽をやっていて，邦楽の仲間と一緒にここで演奏会をしたい」と。図書館は講演会とかの音を出すイベントは1階でやりますけど，２階，３階で本読んでおられる方もいらっしゃるので「さすがに音楽はどうだろう」といろいろ運営会議で揉みまして，じゃあ，毎月１回，第一木曜日が伊丹市立図書館は館内整理日なんですが，この館内整理日にやったらいいじゃないか，と。平日だからお客さんがどれだけ来てくださるかわからないんですけどそれでやらせてくださいということでやったところ，７０人，８０人ぐらい来られています。３カ月に1回ぐらい第一木曜日にやっているというイベントで，ずっと続いています。

このほかにですね，「伊丹市立図書館ことば蔵みんなのアイディアが実現する場に」というチラシを入れさせていただいていますが，これはいろんな市民企画のイベントの写真をつけさせていただいています。これも本当に一部でほかの方に申し訳ないですが，こういうチラシを作って運営会議に来てねというＰＲをしているというチラシです。

運営会議で市民企画がたくさん出ますが，やっぱりことば蔵の職員も頑張ってアイディアを出さなきゃということで，交流担当という職員もいますので，ことば蔵の職員もいろんなアイディアを出しています。

一つが，若い男性職員が出してきたんですけど，「恋のカエボン」と言いまして，カエボンって本の帯をつけて自分がお勧めしたい本をＰＲするもので，それをちょっと合コンと結びつけたいと言い出しまして，「恋のカエボン」，本の交換プラス合コンということで，１次会はことば蔵でやって，２次会は近くの飲食店でやる，というようなこともやったりしました。

これは，「蔵トーーク」と言って完全にアメトーーク！のパクりですね。これも若い男性職員が出してきたんですけど，「アメトーーク！やりたい」と。「アメトーーク！はダメだから蔵トーークやれ」ということで，蔵トーークという名前で野球をテーマにやりました。これは交流戦の阪神対ロッテ戦でしたか，それを見ながら１回表はこんな話をしよう，１回裏はこんな話をしよう，と各回でそういうテーマを決めてやったところ，子供たちがたくさん集まりまして，今まで自分でやった野球の，体験してきた名場面みたいなところを話したりとか，子供だからその辺の体験も少ないんですけど，いろんな話をしてくれたりしました。まあ，楽しめたイベントかなと思ってます。

あと，「帯（オビ）ワングランプリ」，これは募集をしまして，本の帯を自由に作っていただくということで，作っていただいた帯はことば蔵に展示しまして，

来館していただいた方に投票をしていただくということと，もう一つ，本屋さんとタイアップしています。今，伊丹の４店舗の本屋さんとタイアップしまして，それぞれ伊丹本屋大賞というのを決めまして，「自分のところでこの帯だったらつけて売ってもいいよ」という本を選んでもらいます。１０冊とか２０冊とかカラーコピーするんですね，その帯を。実際にキャプションとかつけて売っていただくというようなことをしましたところ，この場合は中学生なんですけど，この子の親とか友達とかおじいちゃんおばあちゃんとかたくさんの方が買いに来てくださるということもありまして，本屋さんとＷｉｎ－Ｗｉｎになったりするんですね。だから今結構本屋さんとタイアップしたりもしています。

あと，「紅白歌詞合戦」というのを年末にやりまして，真剣に自分の好きな歌手を紅組と白組，女性と男性に分かれてアピールするイベントをやっています。何度かやっているんですけど，なかなか白組が勝てないということで，紅がやっぱり上手なんですね。女性がすごいうまくて，女子中学生なんかがＦＵＮＫＹ　ＭＯＮＫＥＹ　ＢＡＢＹＳの歌詞を出してきて，ぐっとみんな泣けてきたりするような感じでやっぱり紅組が強いなと，全然白組が勝てません。こういうイベントもやっています。

あと，中心市街地に来ましたので，中心市街地の活性化ということも一つ課題なんですね。

これは「まちゼミ」という事業で，ノンアルコールカクテルパーティーというのをやりました。彼らは実はバーテンダーなんですね。図書館は社会教育施設だから，さすがに酒は飲めない。じゃあギリギリのところでやろうということで，ノンアルコールのカクテルの作り方を教えていただきました。図書館カウンターをバーカウンターに見立てまして，バーテンダーにノンアルコールカクテルの作り方を教えてもらったというイベントです。彼らはもちろんバーテンダーなんで，暗いところでいつも働いているので，図書館に来たら「まぶしい，まぶしい」って言っていましたけど，日曜日の昼間にやっていただきました。

あと，部活動。市民の方が部長になって部活動っていうのを三つほどやっています。

一つは「カエボン」ですね。これは，１階は書架は全然ないんですが，カエボン棚っていう本の交換をする棚があります。本の帯を書いて交換しましょう，ただ単にいらない本を持ってくるんじゃなくて，お勧めのものを預けてねと。

あとはＺＩＮＥ。ＺＩＮＥっていうのは，マガジンのジンで，自分のオリジナル本を作ろうということでワークショップを開いていまして，子供たちが４ページとか８ページものの自分のオリジナル冊子を作っているイベントです。これもクラブ活動になっています。

あと，ビブリオバトルですね。これも市民の方が中心になって，当日の進行なんかは，市民の方がやっていただいているというような感じで進めています。

こういう三つのクラブがありまして，あと一つ最近，アーカイ部という，アーカイブの「ブ」がクラブの「部」の字をつけているようですが，アーカイ部というクラブが立ち上がりましたので，これから見守りたいなと思っています。

あと，歴史的なストーリーというのが，ことば蔵は伊丹市の宮ノ前という土地にあるんですけど，そこに１００年前に私立の図書館があったんですね。そういったストーリー，ちょっとおもしろいなということで，その私立の図書館を作った方が図書館と塾を併設で作られていて，塾の利益で図書館の本を買っていたというような立派な方で。その塾の「三余学寮」という名前を使いたいねということで１００年前の塾を現代に再現という「三余学寮」ということをやったり，その方が作られていた「伊丹公論」という新聞を復刊させ

たりということで，ちょっと歴史的なストーリーなんかも使わせていただいています。

「三余学寮」はこんな感じで，今，子供向けの塾はたくさんあるので，大人向けの塾をやってもらおうということで，元校長先生に来ていただきまして，国語の授業をしていただきました。あと，公論ですね。昭和の時代に作られた伊丹公論を復刊させまして，７３年ぶりに復刊ということでこれも各誌に取り上げていただきました。

いろんなことを合わせまして，昨年Ｌｉｂｒａｒｙ ｏｆ ｔｈｅ Ｙｅａｒの２０１６年大賞というのをおかげさまでいただきました。

最終の選考会で使った，これもまた運営会議の方がプレゼンしてくださったんですが，そのプレゼン資料がおもしろかったのでちょっとご紹介します。

交流フロア運営会議っていうのを中心にプレゼンされたんですけど，「本を通して人に出会う交流フロア運営会議」こんな感じですね。来月こんな企画やってみたいけど，みたいな感じでおっしゃいます。あるいは，自分ができなくてもここで何かできそうな友達連れて来ました，そんなのも全然ありです。もちろん企画がなくても，聞くだけでも全然オッケーの会議です。

あとこんな感じですね。「こないだのイベント正直どうでした？」とちょっとだめ出ししたり，「もっとこうやったら盛り上がったんじゃないか」みたいなことも言ったり，これは図書館の職員からの悩み相談，「館内で走り回る子にどう注意したらいいんだろう」と。公園みたいな図書館と言いながら，やっぱり走り回ったら危ないんで注意するんですが，うまいこと注意するのはどうしたらいいんだろうみたいな相談もします。「オープンであること」「本が好きになること」ってなんだろう？っていう感じですね。

「趣味はことば蔵です」これも会議に来られた方で本当に言われた方がいるんですけど，その言葉もつけたと。こういうものや交流事業を人数や予算など数字を使って示したスライドがうけたのか，最終選考会の大賞をいただいたという形になっています。

Ｌｉｂｒａｒｙ ｏｆ ｔｈｅ Ｙｅａｒというのは，開館のときから市民の方と「いつか取りたいね」ということを言っていたんですね。それはもう全然目的でもなくて，一つの目標，遊び感覚で目標にしていたんです。いつか取りたいなみたいなことを言っていて昨年取れました。でも，やっぱりそれで終わりではないんで，じゃあこれからどうしようという感じで考えています。

自分は，この４月から館長の兼務ということになったので，じゃあどうしよう，といろんなことを図書館職員と話をしています。一番下に書いていますレファレンスの充実っていうのは，館長になってすぐに司書のほうから言ってきたんですね。「やっぱりレファレンスを頑張りたい」って言ってたんで，「じゃ，やろう」と，「真剣にやろう」ということで，今，すごく力を入れています。

あと，民間企業とのコラボ，社会教育施設とのコラボ，近隣の学校とのコラボ，文化施設とのコラボ，こういった連携を強めていく。市民と一緒にやっていく運営会議であったり，市民企画の事業っていうのはもちろんずっと続けていくんですけど，これだけじゃなくて，やっぱり５年後１０年後を見据えたとき，図書館も全然聖域じゃないと思うんですね。公共施設マネジメントということで，うちでいえば博物館とか産業情報センターとか結構やり玉に上がっています。私も図書館職員に言ってるのは「図書館は全然聖域じゃない」と。今，まだ5年しか経ってないし，調子いいからチヤホヤしてくれるけど，１０年後とか２０年後はわからないっていう話をしていて，そう思ったときにやっぱりいろんなこと考えていかなきゃいけないなと。

そういったときに，レファレンスもそうですし，も

っともっとほかのいろんなところと連携しなきゃいけないだろうなと思っています。

今年からやり出したのが，イオンさんとの「ふぉと俳句の杜」で，イオンのほうから企画提供してきたイベントです。写真を撮りながら俳句を作るということを，ことば文化都市なんで，そういうことをやっていきましょうということをアピールしてきたので，連携しながらやってます。

右側はＴＳＵＴＡＹＡさんですね。ＴＳＵＴＡＹＡさんとは，ムービーワングランプリ，ムービーですね。ＴＳＵＴＡＹＡさんのソフトを使って子供たちに「君が見た映画でよかったところを言葉で表そう」とキャッチコピーを書いてもらうと。これ，すごくおもしろくって，今年から始めたんですけど，なかなか泣けるようなキャッチコピーも出てきてます。こういう民間企業との連携もちょっと強めていきたいなと。

ほかもいろいろ，みなと銀行という地元の銀行とかも来られてるんで，ぜひ一緒にやっていきたいなと考えています。

あとレファレンスですね，実はこの方，丹波杜氏，杜氏さんなんですが，伊丹の酒造りのため，今は酛摺りしたり，歌を歌いながら酒を造るっていうことはないんですけど，昔はやっぱりやっていたということで，文献を調べられて酒造り歌を復活させてくださいました。これも，運営会議に杜氏の方が来られて，実際に酛摺りしながら歌を歌っていただいたというイベントをしました。

あと，文化施設とのタイアップということで，今ちょうどことば蔵から近い美術館で林明子さんの原画展をやっています。林明子さんというと「はじめてのおつかい」が代表作なんで，「はじめてのおつかい」に絡んでいろんなスタンプラリーをしようかなと，ことば蔵といろんな施設を回っていただくというようなスタンプラリーも始めたりしてます。これは商店街が乗っかりまして，中心市街地の活性化ということもありますので，近くの商店街が，じゃあうちは「はじめてのおつかい」をする，と言って，実際テレビでやってる「はじめてのおつかい」を今年度しました。子供たちが３歳から小学３年生で二人一組になっておつかいをしたんですけど，本当にリアルな「はじめてのおつかい」を現場で見たなと思います。こう野菜，野菜重たいんですよ，ずるずる引きずりながら買い物している子供たちとか，一人が泣きながら，一人が「頑張れ」って言いながらおつかいをしている子供たちとか。それはどこから始まったかっていうと，美術館で林明子さんの絵本の展示をやる。ことば蔵も同じように読み聞かせとかいろんなイベントを絡める。商店街もこうやって乗っかってきたということで，結構まちぐるみでやったようなイベントです。

あと，今年５周年だったんですね。今年の７月１日が５周年だったんですけど，そのときに，酒造会社がことば蔵の近くで二つあるんですけど，その二つの酒造会社にお願いしまして，５周年の記念ラベルを貼っていただいてお酒を販売していただきました。この左側の女性，図書館の職員なんですけど，彼女がデザインしまして，いろんな市民と一緒に作り上げてきた５周年，というモチーフにして，二つデザインしてくれて，それを各酒造会社で売っていただいたところで，結構これが売れまして，これもＷｉｎ－Ｗｉｎになったかなと思ってます。

こういう民間企業との連携とか，文化施設の連携とかこういったものを大事にしながら，これからレファレンスも力を入れていきたいなと。その司書の彼女が言うには，今，地方創生レファレンス大賞というのがありますけども，それを狙いたいなと，それを目標に頑張っていきたいなと思います。

あと今，大手前大学で教えておられる倉田芳美という漫画家の先生とタイアップして，伊丹の漫画を書い

ていただいています。多分来年，年初めぐらいにはできるかなと，ことば蔵のことも書いていただく予定にしています。そういう学校とのタイアップを考えていたり。あと，インスタですね。インスタをちょっと勉強してきたやつがいるんで「じゃ，インスタしようか」みたいなところで，図書館の中は普通は来館の方の顔が写ったらだめなので撮影禁止ですけど，撮影できる日をつくったり，近くの雑貨屋さんとタイアップしたりして，インスタ映えするような写真を撮れるようにしようかなと。インスタグラムの「グラ」はことば蔵の「蔵」を使おうかなという感じで司書たちと企んでいるところです。

これからまだまだいろんな取り組みをしていきたいと思っていますが，ことば蔵のこの５年間の取り組みを紹介させていただきました。

どうもありがとうございました。

～質疑応答～

○質問者

岡山県倉敷，ひまわり図書という個人施設図書館から参りました。図書館施設長の井上と申します。

図書館というところは，本来は奉仕の考え方でございまして，経費を取ってはいけないことになっているわけですが，例えば清酒のラベルを作ろうとすると当然作成の費用もかかるでしょうし，それの回収ということも生まれるんじゃないかと思うんです。そこら辺のことをちょっとご説明いただけますか。

２０万円という予算があるんですよね。私も実は，お琴の演奏をやりましたり，お茶会なんかもやるんですが，とてもこんな金額ではやれないんです。

○綾野氏

そうですね，２１ページのほうにおっしゃっていただいたスライドがありまして，最終選考会のプレゼンですが，年間１１８回のイベントで述べの参加者数が２，５７３人，でも総予算が２０万円ですよ，年間の新聞掲載回数は７６回ですよと，この数字で見せたんですね。これが多分審査委員に刺さったのかなと思うんですけど，この２０万円っていうのは，ほとんどチラシ代です。

基本的に講師料とか，演奏料とかは無料でやっていただいているんですね。やりたいことをやってみるということで，無料でやっていただいています。参加者の負担金も無料。その代わり，ことば蔵のフロアを使っていただくのも無料ってことで，無料×無料×無料のシステムでやっていますので，この予算でやっていけるというところでございます。

＜事例発表②＞

「マルシェ　本活（ほんかつ）プロジェクト」

青空の下で本を楽しもう

～本と人をつなげる 出前図書館～

新庄市立図書館

館長　　高橋　一枝　氏

館長補佐　郷野目　香織　氏

○高橋氏

みなさま，こんにちは。宮城県のお隣，山形県の新庄市からまいりました。新庄市立図書館の高橋と郷野目になります。

昨年度，山形県で北日本図書館大会の事例発表をさせていただく機会がございました。そのときに日図協の副理事長もいらっしゃって，新庄の図書館をぜひ見たい，地方の図書館の危機を知りたいんだということで，一緒に市の図書館に来ていただいたなんていうこともございます。それから先ほどの伊丹の綾野館長さん，新庄は１００円商店街発祥の地なんですけれども，そのまちづくりのシンポジウムにも参加していただいて，新庄に来ていただいたということを先ほど伺って，大変うれしく思っております。

そんないろんなご縁がありまして，今回の全国大会発表ということで，大変ありがたく感謝しております。昨年は１５分だけだったんですけれども，今年は４０分いただけるということで，ぜひ，新庄市の図書館のＰＲも一緒に兼ねてまいりたいと思います。よろしくお願いします。

まずは，私の自己紹介からさせていただきます。

私は図書館に勤務して１５年になります。１０年前に指定管理事業に移行すると同時に一般社団法人とらいあという団体の常務理事をいたしまして，図書館の指定管理事業に関わってまいりました。館長職を命じられてからは５年目になります。

毎日，小さなまちの図書館で何ができるのかなとか，何が求められているんだろうなんて日々悶々と妄想していますが，妄想はいつか実現するんじゃないかなって信じてここまでやってきました。実は，それが周りの方みんなをハラハラもさせているんじゃないかなと感じています。

そして，今日の発表資料は全て郷野目が段取りしてくれました。今日は，郷野目の足を引っ張らないように頑張ります。どうぞよろしくお願いいたします。

○郷野目氏

館長補佐の郷野目です。ちょうど今年４月より第７期日本図書館協会認定司書に認定されました。山形県では認定第一号ですので，偶然にもこのタイミングで東北開催の全国集会で発表することができて，とてもうれしく，また光栄に感じております。

それでは，はじめに新庄市と新庄市立図書館についてご案内いたします。

まずは新庄市の場所ですが，日本地図の上のほう，東北六県の一番上にあるのが青森県，その下が秋田県，その下にあるのが山形県です。山形県の形は人の横顔のようになっていて，県の公式キャラクターおもてなし課長のきてけろくんは，まさに山形の顔そのままを表しています。中でも新庄市を含む８市町村のある最上地方は，後頭部の辺り。こめかみ部分，ちょうどき

てけろくんのさくらんぼの実の辺りが新庄市です。山形県北東の内陸部にある山間の田園・豪雪地帯であり，江戸時代には新庄藩主戸沢家が１１代にわたって治めた城下町として栄えました。

城下町新庄といえば，郷土色豊かなお祭りのまちです。春は，桜の下で春告魚とも呼ばれる大きなにしんを焼いて食べるカド焼きまつり。夏は，江戸時代より２６０年以上の長い歴史を誇る新庄まつり。秋は，食欲を満たすそばまつり，味覚まつり，大産業まつり。冬は，豪雪地帯ならではの雪まつり。特に新庄まつりは，昨年１２月にユネスコ無形文化遺産に登録された「山・鉾・屋台行事」３３件中の１件であり，山形県初登録となった市民の誇りです。２６２年目を迎えた今年は，ユネスコの追い風を受けて三日間で５５万人，新庄市の人口の１５倍以上を集客しました。

みなさまのお手元に商工観光課発行のパンフレット「にゃー」がありますので，後ほどゆっくりご覧ください。「にゃー」の由来は，新庄弁で「んだよにゃー」「ありがでにゃー」，なんでも語尾に「にゃー」をつけるので，「猫みたいだね」とよく言われます。地元の印刷屋さんがつくったにゃんこカレンダー，にゃんこ手ぬぐいなどほっこりかわいい新庄弁グッズも新庄駅構内のもがみ物産館で販売中です。

さて，ここからは，新庄市公式キャラクター，神室山に住む天狗のかむてんと一緒に発表してまいります。かむてんの生みの親は，あの『幽☆遊☆白書』，『ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲ』など，世界的人気漫画家の冨樫義博先生です。こちら昨年の広報しんじょうの表紙を描いてくださいました『ドラゴンクエスト精霊ルビス伝説』の阿部ゆたか先生，冨樫先生，『本家のヨメ』の岡田理知先生，『酒とナミダとマリエと赤子』の安彦麻理絵先生は，全員新庄出身，『３月のライオン』の羽海野チカ先生はお母様が新庄出身という，人口約３万６，５００人の地方都市から多くのプロ漫画家を輩出したふるさととしても聖地化しつつあります。

各先生のファンの方々，昨年１２月にオープンした新庄駅構内の新庄最上漫画ｍｉｎｉミュージアムにぜひお越しください。ここでしか見られない原画やサイン色紙のレプリカなどがぞくぞくと集まっています。新庄市立図書館所蔵の漫画も特別展示中ですので一日かかっても読み切れないと思います。

仙台駅から新庄駅までは，車や電車で約２時間半，明日の研究集会終了後には，ひとっ走り，我が町新庄にもぜひお立ち寄りください。

○高橋氏

では，新庄市立図書館の概要をご説明いたします。

はじまりは１９０６年。約１１０年間の歴史を持っています。現在の館は，江戸時代の武家屋敷跡の庭園をそのまま生かした場所に１９８８年に新館建築されました。庭園の榧の木は樹齢３５０年。新庄市の指定天然記念物にもなっている巨木です。この榧の木からは，毎年たくさんの榧の実がこぼれ落ちるんですが，そこで誕生したのが図書館のマスコットキャラクターかやの実ちゃん。ちょうど１００周年の記念のときに，私が描かせていただきました。

現在は指定管理者制度に移行しておりまして，一般社団法人とらいあが２年間の一部業務委託を経て，管理事業者として３期９年目に入りました。職員数１２名，数値的なところはご覧のとおりです。

まちの小さな図書館では頑張っているかな，なんて自画自賛しているんですけれども，先ほど植松先生のお話の中にあったような広い施設，広い駐車場がある図書館というよりは，残念ながら，１３台しか停められない駐車場，規模的にも小さい図書館の中で，駐車場のことを利用者の方に文句を言われながら，日々３００人くらいの方々に利用をしていただいております。

私と郷野目が理事兼職員として所属しております一

般社団法人とらいあは，平成１９年度より図書館の一部業務委託，平成２１年度より指定管理事業２期８年と，１１年目に突入いたしました。読み聞かせ活動中心の「図書館ボランティアサークルかやのみ会」さん，それから読み聞かせから始まる人づくり，まちづくりをテーマに活動してきた「ＮＰＯ法人子育てネットワークバルボン」さん，直営時の日々雇用職員だった司書の３者９名でとらいあを設立いたしました。

とらいあの名前は，３者が集まって家庭，学校，地域，三つをつなぐ三角形のトライアングル，それから努力する人，そして挑戦する人トライアー，そこに由来しております。現在は，幼児教育，高齢者福祉，商店街店主など多方面で活躍する理事役員の方々１２名が，図書館の管理運営を支えてくださっています。

さらに，各理事の人脈や特性を生かしました幅広い市民協働事業も行えるということで，地元の組織としてはたくさんの活動をしており，地域に貢献，生涯学習に寄与するための活動を続けております。この１０年間の中にも指定管理事業のほかに，学校図書館支援事業だったり，あと郷土資料の整理再分類事業，学校図書館を活用しましょうという推進事業などを同時に受託もしております。

新庄市の読書活動の推進，生涯学習の知の拠点としての図書館サービスの向上に取り組んでまいりました。２０１４年，市政６５周年記念事業がありまして，郷土の人・場所にまつわる本を紹介した，『しんじょう浪漫文学歴史さんぽＧｕｉｄｅ』というものを団体で作らせていただきました。こちらのリーフレットは市内の中学生全員に配布しまして，ふるさと学習や郷土学習に活用いただいております。とらいあは郷土を愛し，市民とともに次世代につながる図書館として，本，人，歴史，情報，４つを未来へつなげることを理念としております。

○郷野目氏

ここからは，レジュメに沿って発表していきます。

１．隠れた地域のニーズを掘り起こそう

図書館の利用者に関わらず，地域住民が求めているものは何か。隠れた地域のニーズを掘り起こすヒントはどこにあるのでしょうか。みなさまの所属する市町村，あるいは都道府県のホームページを改めて確認するのも一つの方法かと思います。新庄市のホームページを例にとりますと，これはホームページの画面上に表示されます開いたページの位置順，パンくずをまいたように足跡がわかるパンくずリストです。

ここまで開いてようやく見つかるのが，平成２９年度新庄市まちづくり市民アンケート調査結果です。各自治体でどのページにあるのか全く違いますので，試しに後ほどご自分の自治体で探してみてください。

アンケートに戻ります。７１の項目について回答者の考え方を選んでもらい，満足度順位，重要度順位，ニーズ度順位を出しています。重要度が高いのに満足度が低い。重要度から満足度を引いた数値，すなわち重要度と満足度の開きが多い順になっているのがニーズ度です。１位から５位を言い換えれば，市民は「働きたい場所がない」「専門の医療機関が足りない」「空き地や空き家だらけ」「中心市街地が寂しい」「働き手が育たない」。痛烈な言葉ですが，自分たちのふるさとに切実な危機感を持っています。

中でも将来の働き手である若者はどのように感じているのか。各種調査のところに平成２７年度若年世代定住思考及び意向調査があります。選択肢の中から選んでいく方式です。ここで注目したいのは，居住意向です。新庄に愛着を「感じている」と「少し感じている」を合わせると全体の８１．１％。ふるさと好きな若者がとても多くて安心します。ですが，将来の希望居住地では，「新庄市にこれからも住み続ける」と「一度は県外出てみたいがいずれは新庄市に戻ってきたい」

を合わせると３５．５％。ふるさとが好きなのに定住希望が少ない結果です。「できれば住み続けたいがやむを得ず県外へ移り住む」６．５％。住み続けたい若者にはぜひ残ってほしいですね。ならば，彼らが新庄に定住するための条件に挙げた１位から３位が「安定して働ける場所が欲しい」「自分のスキルを生かして働ける場所が欲しい」「十分な収入が欲しい」。先ほどの市民アンケートにもあった「働きたい場所がない」つまり「働きがいのある場所が欲しい」というのが全世代共通でニーズが高いことがわかります。

図書館が直接的に雇用の場を生み出すことはできません。ですが，人々がなんらかの形で集まれる居場所づくり，すなわち地域の活性化のために役立てることがきっとあるはずです。先ほどの定住条件トップ３に続くのが「市内地域内がにぎわっていること」。そこに「活躍の場があり，暮らしにやりがいが感じられること」を合わせると１５．８％になります。若者たちが活躍できる場があって，地域内がにぎわえば，暮らしにもやりがいが感じられます。自由記述式の若年世代のまちづくり推進アイディア２８８件のうち，商工業振興とまちづくりへの意見が合計１２４件も出ているのも，若者たちが地域を盛り上げたいという熱意が伝わってきます。

若い世代も魅力を感じる場所，他世代が積極的に交流できて暮らしにもやりがい，楽しみが感じられるような新しいスタイルの居場所づくりが地域活性化の起爆剤となるチャンスが十分にあるのです。

２．図書館をフィールドとした幅広い連携・交流

新庄市立図書館は市民団体が指定管理者でもありますので，積極的に市民協働事業に携わり，また図書館事業にも数多くの団体，個人の方々からお力添えをいただいています。

毎月のお楽しみとしては，かやのみ会には小さいお子さん向けの読み聞かせ「えほんぱーく」，山形県立新庄南高校図書委員会には，小学生向けの読み聞かせと工作「おはなし会」をお願いしています。

かやのみ会と南高校，とらいあは，夏にお庭で開かれる特別なおはなし会，「としょかんこどもサマーフェスティバル」でも大活躍です。今年は，雨天のため館内で行われましたが，ボランティアしずくの中学生たちがサポーターとして，小さなお子さんを誘導したり，お土産を渡してくれました。

「夏休み★おべんきょうそうだん」では，最上地区退職女教員会なつめ会と，退職公務員連盟新庄最上支部の元先生方が，図書館の資料を活用しながら子供たちの宿題相談に丁寧に乗ってくださいます。昨年の夏は，元小学校の建物内にある最上広域教育研究センターで，かつろくスペナビ研究会と一緒に，「おはなしプラネタリウム～銀河鉄道の夜～」と星や宇宙の本を貸し出す移動図書館を行いました。

ちょうど今月４日，５日に行われた第１７回図書館まつりでは，かやのみ会の「お話でてこ～い」と，南高校の「ミニおはなし会」。市民のみなさんがおすすめコメントつきで持ち寄った本が次の読み手へ引き継がれる「ブックリスタートパーティ」。地元書店で構成される新庄市立図書館図書納入協力会の「バーゲンブックフェア」。館内には飲食店や自販機がないので，まつり限定オープンのとらいあの「ライブラリーカフェ・キッズカフェ」。山形大学フィールドワーク，同じく山形大学チーム道草，ボランティアしずく，ジモト大学参加の高校生たちの「かむてんと遊ぼう」。元とらいあ職員のハンドメイドブース。お花屋さんのハーバリウム，植物標本のワークショップ。庭園の榧の木からとれた実を使った「かやの実ちゃんをつくろう」。実習に来た中高生がコメントを書いてティーンズコーナーにディスプレイしてくれた，職場体験生のお勧め本展示。プライマルプロジェクトの日本折紙協会会員

による「折り紙名人は君だ」。とらいあ，新庄市読み聞かせサークル連絡会が事務局となった，大阪の「ヤッサン一座」だんまるさんの紙芝居口演と講座。とらいあが運営に携わる最上地域理解プログラムの一環として，新庄最上ジモト大学に参加した高校生・山形大学生・地域の大人による「まちの図書館を舞台にイベントプロデュース」のディスカッション。県内中の図書館員３８２名が投票で選んだ山形県図書館大賞。常設展示の医療福祉健康情報コーナーでも連携している，山形県立新庄病院のお仕事紹介とユニフォーム展示。図書館まつりでもサポートしてくださった，個人登録の図書館ボランティアのみなさまについても活動１０周年特別展示でご紹介しました。

そして，館内の人気者といえばクラゲの水槽コーナーです。山形県の海沿い，鶴岡市立加茂水族館クラゲドリーム館のクラゲ案内ボランティアをしている上級クラゲマイスターの会・海月師（クラリエ）の代表の方が，クラゲ専用の水槽，海水，餌まで全て寄贈してくださっています。高橋館長と司書1名も初級クラゲマイスターの資格を取って，デリケートなクラゲのお世話をしています。山に囲まれた新庄で海の生き物を見られるのはとても珍しいことなので，赤ちゃん連れから年配のご夫婦まで，小学校の遠足コースでも大変喜んでくれて，一緒に展示しているクラゲの本や紙芝居の貸出にもつながっています。このクラゲ水槽については，内野安彦先生の著書『図書館からのメッセージ@Ｄｒ．ルイスの“本”のひととき』でも紹介していただきました。

直営時代から１０年，２０年，３０年以上ご協力くださっている団体もあるのは，みなさん図書館のヘビーユーザーでもありますので，司書職員が日ごろからお一人お一人とのコミュニケーションを欠かさないことに尽きるかと思います。新規で連携する場合も同じで，その団体の中にたまたま図書館の利用者の方がいて，気軽に持ち込み企画しやすい雰囲気をカウンターの司書職員がきちんとつくれているのかなと感じます。

高橋館長が人たらしと言いますか，人脈作りの達人でして，一度会った方，各地のイベント会場でお見かけした方を面白いと思ったら，即ご連絡を取ってあっという間に図書館イベントに巻き込む達人でもあります。もしかしたらみなさまにもご連絡がいくかもしません。

新庄市立図書館の場合は，企画を先行してその企画に沿った人をお呼びするのではなく，先に人ありきで，その方のスキルを生かしたら図書館でどんなことができるかなと企画することも多いです。そこに参加者が次も図書館に来たくなる仕掛けを盛り込むことで，その場限りのイベントに終わらず，図書館の利活用につながるような道しるべを示しています。

○高橋氏

３．ｋｉｔｏｋｉｔｏ　MARCHE

本活プロジェクト

ただいま郷野目が説明したとおり，うちの図書館，これだけたくさんの事業やってるんだなあと，改めて本当にたくさんの方々のお力をいただき，市民協働の事業の大切さを思うわけなんですけれども，そんなたくさんの事業をやっているのに，なぜ図書館がマルシェに出向くのか。新庄市の掲げている課題，生産人口が少ない，若者を呼び戻す新しいスタイルの居場所づくり，そんな地域の魅力を発信できるコミュニティ，それが今回のｋｉｔｏｋｉｔｏ　MARCHEに求められています。実は，このマルシェも市民協働事業の一つになっています。ご紹介するスライドは，新庄市の商工観光課からお借りしてきました。

まず，今，ｋｉｔｏｋｉｔｏ　MARCHEは新庄市のエコロジーガーデン原蚕の杜というところで行われています。原蚕の杜は全国にも先駆けてこういった

取り組みをしているということで，発表の機会が多いそうで，このような新庄市の紹介から入ってきます。

マルシェが行われる新庄市のエコロジーガーデンの施設は，南北約１０ヘクタールの広大な敷地に，蚕糸産業の歴史的建造物が建ち並んでいます。昭和９年に蚕糸試験場として開設されまして，平成１４年に新庄市が国から譲与を受けたのをきっかけにエコロジーガーデンとして生まれ変わりました。半世紀以上にわたり日本の蚕糸産業を支えてきた建物でまだ残っているのは全国でも珍しいということで，平成２５年には，国の登録有形文化財に指定されたそうです。この建造物もすばらしいですけれども，四季折々のロケーションもすばらしいです。この有形文化財を保護するばかりでなく，活用しましょうという計画が始まります。

市として，施設運営での課題，計画についての課題，いろいろとあるそうですが，２０１２年，施設の所管が農林課から商工観光課へ移管されたことをきっかけに，エコロジーガーデン交流拡大プロジェクト実行委員会が設立して動き出します。そしてマルシェの誕生となるんですけれども，こちらのみなさんはマルシェのキーパーソンです。この方がトータルデザイナー，Ｉターンして新庄に帰って来られました。そして，デザインをものに変えていくのが大工さん。あとは，ハーブ農家さん，それから雑貨やお菓子をつくっている方，この方々が実行委員会になって中心的に進めていくわけです。

そして，運営理念，コンセプト，ここちょっと大事なのでお話させていただきたいと思います。経済成長が生活を便利にする一方で，文化や風習などが失われつつある。雪国での生活の知恵を生かし，お金だけではない豊かな暮らしと，失われたつながりを再生し，地域の生活を楽しめることを目指します。新たな交流，居場所づくり，コミュニティの立ち上げになります。「キトキト」という言葉の意味なんですが，蚕や青虫が葉っぱの上をゆっくり歩く様子を表した方言だそうです。

ただ，キトキトゆっくりと行くはずだったマルシェなんですが，大変な人気で，５年間で合計１０４万１，０００人の来場数があったそうです。市内からももちろん，県内，県外，東北，それから首都圏からもいらっしゃっている方もいるというふうに聞いております。キトキトではなくて，本当にバタバタと成長したということをお伺いしました。

こんなすてきな場所で，すてきな方々がものを売ったり，買ったり，ワークショップを行ったりしております。そしてもう一つのｋｉｔｏｋｉｔｏの見応えがありまして，毎年９月にこのすばらしいロケーションをいかした「ｋｉｔｏｋｉｔｏ環境芸術祭」を開催しています。有名なアーティストの方が出店する中で，なんと昨年私たち図書館は怖いもの知らずで作品を出展させていただきました。その結果については，後ほど郷野目から説明があると思います。

２０１５年８月に，地域おこし協力隊の方がシェフとなりカフェをオープンしました。カフェの２階には郷土工芸品を扱うセレクトショップ，それからその奥には「ｋｉｔｏｋｉｔｏ　ＢＯＯＫＳ」といって，２冊の本を持ち込むと１冊好きな本をいただけるというシステムのシェアブックスもオープンしております。このブックスのプロデュースも，お話をいただきまして，図書館としてお手伝いをさせていただきました。

このほかに，地域生活に根ざした文化活動も行っております。

この取り組みは，全国的にも本当に先進事例として注目を浴びまして，ソトコトの雑誌などにも載りました。図書館車で本を読んでいる職員も写っております。このマルシェが何がすばらしいかっていうと，文化財を保護するばかりではなくて，その保護から活用につなげるっていうそこの部分がすごく評価されまし

て，たくさんの受賞履歴がございます。

このようにたくさんの方々が関わる市民協働マルシェとなっています。今後はさらに整備を進めて，官舎をゲストハウスに変えて，たくさんの観光客の誘致，それから新庄の自然や文化にもっと親しんでもらおうということで活用をするそうです。これからの計画になるんですが，現在４期に入りました。４期には文化財の保護ということで，図書館の所管課，社会教育課も策定部会員となっております。

ここまでが商工観光課のスライドになります。このｋｉｔｏｋｉｔｏ　MARCHEのプロジェクトチームがどうしてすばらしいのか。行政区ばかりではなくて，民間，商店，大学，それから高校生，地元の農家さん，たくさんの多世代，異業種の方々を巻き込んで，自分たちがまずは楽しく感じる場所，コミュニティを作ろうということで，その地元の熱い人たちが作り上げている市民協働事業っていうところで，本当に盛り上がっているのかな，なんて思うんですけれども，じゃあなぜ，そこに図書館が。図書館も今，郷野目の発表のように熱いです。市民協働，それからコミュニティ，いろんなリンクする部分がありまして，巻き込まれるべくして巻き込まれたのかなあなんて思います。

○郷野目氏

ｋｉｔｏｋｉｔｏはＳＮＳで口コミを拡散する若い世代や家族層を中心に幅広い年代に人気が高いソーシャルプロジェクトであり，まさに先ほどお話しした市民が集う新しいスタイルの居場所，非日常の憩いの空間となっています。

エコロジーガーデンの敷地には，まゆの郷という産直市場もありますので，多世代ファミリーがｋｉｔｏｋｉｔｏとまゆの郷を回ってから待ち合わせする楽しみ方もできます。

市場形式のイベント自体は，山形県内だけでも１５カ所以上で開催されている中，ｋｉｔｏｋｉｔｏが市内外からこれだけの集客力を誇るのは，５月から１１月までの年７回，第３日曜日，毎回異なる１年間分のテーマを年度初めに事前告知していることが大きいです。その都度出展者を募り，テーマに沿った商品やイベントを提供するため，そのテーマが好きな人が多く集まり活発な交流が行われます。売り手と買い手がいつも同じで新鮮味がなくなり，リピーターが飽きてしまうような懸念もありません。特に人気が高いのは毎年行われるパン祭りで，地元の人気店から東北各地からの出張販売まで豊富なラインナップが出揃うため，午前１０時のｋｉｔｏｋｉｔｏ開始前から各店に行列ができるほどです。

そんなｋｉｔｏｋｉｔｏ　MARCHEと図書館の出会いは２０１３年４月，商工観光課から「移動図書館車かやの木号を出してみませんか」とお声がけいただいて，翌５月に初参加したところから始まりました。初めの数回は，野外イベントに飛び出すことに意義があるといいますか，ｋｉｔｏｋｉｔｏの雰囲気に馴染めているのかなとおっかなびっくり，読み聞かせをメインにして，図書館まつりや新庄市教育の日コスモスデーでも行っていたしおり作りのワークショップをしていました。その様子を見ていたｋｉｔｏｋｉｔｏの運営事務局の方が，ちょうど図書館の利用者でもありまして，その年の秋の打ち合わせで「テーマや目的はなんでしょう？　ｋｉｔｏｋｉｔｏ　MARCHEだからできるチャレンジを楽しんで」と持ち込んでくださったワークシートに司書全員がアイディアを書いたときから明確な方向性が見えてきて，ｋｉｔｏｋｉｔｏの毎回のテーマに沿った選書とイベントを企画するという現在のスタイルにつながりました。

この取り組みは，２０１４年３月文科省発行の『図書館実践事例集』でまちづくり事例として掲載されました。文科省ホームページからもご覧いただけます。

ここで，本活プロジェクト，移動図書館車かやの木号の具体的な流れをご紹介します。担当職員は司書２名と移動図書館車の運転手です。あらかじめ数日前から大体１００冊ほど，ｋｉｔｏｋｉｔｏのトータルコンセプトであるハンドメイド，出展するお店，その月のテーマ，会場が野外，家族連れが多いことを考慮して選書します。例えば，秋の場合，ハロウィン，かぼちゃや芋のスイーツ，虫，落ち葉など。

かやの木号には移動図書館システムの入った専用のノートパソコンを持ち込みますが，館外ではＷｅｂ接続できないため，当日の朝に本館のシステムに接続して最新の利用者データや貸出データを取り込んでおきます。会場に着いてからの準備は約１時間。小雨が降れば屋根のあるところ，日差しが強ければ木陰のあるところと位置を微調整します。誰でも自由にかやの木号に乗り込めるように車の扉は開放して，外側を切り紙で飾りつけ本をディスプレイします。

車の中でも外でも自由に本を読んでいただけますし，図書館利用カードをお持ちの方にはノートパソコンで貸出をします。利用カードをお持ちでない方も，利用者検索してカード作成記録がある場合は貸出をします。カードを作ったことがない方については，新庄市または山形県内在住の方が住所証明をお持ちなら，当日申込手続きでカードを新規作成し貸出します。本の貸出はｋｉｔｏｋｉｔｏで，返却は図書館となっております。ｋｉｔｏｋｉｔｏではリライトカードに印字ができない代わりに，貸出冊数と返却予定日を書いたしおりを本に挟んで渡します。ｋｉｔｏｋｉｔｏは月１回ですが，個人の貸出期間は２週間なので，普段ｋｉｔｏｋｉｔｏにしか来ない方々がその場で本を借りて図書館に返却することで新規利用拡大にもつながります。

３時にｋｉｔｏｋｉｔｏが終わり，図書館に戻ってからノートパソコンを再度Ｗｅｂ接続して本館システムに貸出データを流し，返本・片付けをして終了です。

一方，本活プロジェクトのイベント部分ですが，ここでも幅広い交流が生きてきます。今年の活動ですけれども，５月のコーヒー＆パンフェスは，山形大学エリアキャンパスもがみ・フィールドワーク授業を選択した１年生１０名が前日にエコロジーガーデンを見学，レクチャーを受けて，かやのみ会と一緒に，読み聞かせ，折り紙のクロワッサンしおりとコーヒーフィルターの小物入れをつくるワークショップ，ｋｉｔｏｋｉｔｏ　ＢＯＯＫＳの説明を行いました。６月の肉フェスも，同じ１０名が自分たちでスタンプラリーの企画をして，ｋｉｔｏｋｉｔｏ受付，読み聞かせ，塗り絵，ｋｉｔｏｋｉｔｏ　ＢＯＯＫＳを回ると職員お手製のダンボールガチャを回してお土産がもらえるイベントを行いました。

ここで山大生たちが作った動画をご覧ください。

～動画鑑賞～

７月のクラフト＆フリーマーケットは，東北森林管理局山形森林管理署最上支署の６名が，木の枝でつくるしおり作りと，廃棄した防水加工の森林くずとトラロープが材料のエコバッグ作りのワークショップ，専門の道具を実際に触れるお仕事体験，森林の初期消火などに使う背負い式放水機で勢いよく水鉄砲を飛ばせるのは子供たちに人気でした。昨年のエコバッグ作りには，東京の有名なブックカフェの店主も来てくださったそうで，後日ＳＮＳで，楽園のような場所でしたと発信してくださいました。

９月の環境芸術祭・ギブミーベジタブルでは，実習で図書館に来た東北芸術工科大学の３年生２名に企画立案をお願いしたところ，お子さんでも折れる野菜の折り紙ワークショップを考えてくれました。当日は，かやのみ会が青空おはなし会，ボランティアしずくの高校生２名がコックさんになり子供たちが折った野菜

を調理してお料理を完成させてくれました。しずくの学生と先輩のオールドロップのメンバーは，５月，６月，１０月もイベントスタッフとしてワークショップをサポートしてくれました。

ちなみに昨年９月は，社会人演劇集団・新庄演劇研究会と『きときとしょえんけん』を立ち上げ，市民の足型を多数集めて小魚に見立てたレオ・レオニのスイミーがモチーフの巨大オブジェ「Ｏｎｅ　ｆｏｒ　ａｌｌ　Ａｌｌ　ｆｏｒ　ｏｎｅ（ひとりはみんなのために　みんなはひとりのために）」をｋｉｔｏｋｉｔｏ環境芸術祭２０１６に出展したところ，市民賞に輝きました。当日は演研メンバー６名がスイミーの大型絵本を読み聞かせしてくれたのも得票につながったと思われます。

１０月のお米とご飯のおとも祭りは，南高校１３名がハロウィンにちなんだパネルシアターの読み聞かせ，黒いゴミ袋でポンチョ作り，おばけを飛ばして箱の中に入れるぴゅんぴゅんおばけ遊びを行いました。親子で夢中でポンチョを作り，お子さんはそのままハロウィンコスプレをしてｋｉｔｏｋｉｔｏを回ってくれました。

４．図書館がまちをつくる

このように，文化活動や環境芸術活動を積極的に行うｋｉｔｏｋｉｔｏは，社会教育施設である図書館との相性が非常によく，季節やテーマに沿った選書はまさに図書館の得意分野ですので，「待つだけの図書館から積極的に情報を発信する図書館へ，幅広い世代から愛され親しまれる図書館へ」をコンセプトに参加し続けて５年が経ちました。

図書館は新規利用拡大，ｋｉｔｏｋｉｔｏ側は大人たちが買い物する間に子供たちだけでも楽しめる無料イベントを開催できるＷｉｎ－Ｗｉｎの関係です。ｋｉｔｏｋｉｔｏは，人と人とが触れ合って，手作りの品とまごころとかけがえない時間をシェアし合う場所なのです。ｋｉｔｏｋｉｔｏ　MARCHEを通じて，人を育て，心を育み，地域とつながり，新しいスタイルのまちづくりに貢献する。郷土の宝である文化，人，本を未来の世代へとつなげるよう，新庄市立図書館は市民みなさんのマンパワーを原動力にこれからも邁進してまいります。

○高橋氏

最後に私からも一言，図書館が図書館であり続けなければならない大切な部分，それから，時代の流れに変容していく多様化する図書館の部分。どちらも大切な図書館の役割で，職員は本と向き合っていることだけが，館で待っているだけが，図書館職員の仕事ではなくなってきているなあと痛感しています。

図書館の市民協働事業が他者と連携する，協働する。ただ簡単に言っているわけではなくて，そこにはキャリアがあり，スキルがあり，コミュニケーション能力が必要で，たくさんのパワーを消耗します。周りの方々との調整力がなければ，例えばボランティアの方々や学生さんにやりましょうと言っても振れないし，自分たちの事業の目的をちゃんと落とし込んでいなければ，ただのイベントやイベントのお手伝いになってしまいます。その部分を図書館のみんなで確認して共有して進めていき，そしてフィードバックして新しい事業の展開，今までした事業の精査，時代に合った図書館作りをしていくことが大切であるなと考えております。

関西の作家さんとつながって，関西弁でちょっとお話しをする機会があって，「司書が本を読んでなんぼ。人と出会えてなんぼの時代。そして図書館を知ってもらって使ってもらってなんぼの時代なんだ」って，人，もの，こと，そして本をつなぐ役割を，楽しく妄想しながらやっていきたいなと思っております。

ありがとうございました。

＜事例発表③＞

『つなぐ』　本との出会いは きっと 人との出逢い

～0歳から１００歳まで楽しく憩う図書館づくり～

鹿角市立図書館

館長　小林　光代　氏

どうもみなさまこんにちは。外は暗くなってまいりました，こんばんはのほうがよろしいでしょうか。

私，今日「『つなぐ』本との出会いはきっと人との出逢い」というテーマでお話ししようと思ってまいりましたが，今，新庄市立図書館の方のお話に全て私の言いたいことが網羅されていまして，ここで言わなくても，もう退場して構わないのかなっていうくらい立派な発表が続きまして，本当に肩身の狭い思いをしながらここに立たせていただいております。

当館は，こんな立派な会場でお話しするような事例は本当に持ち合わせておりませんで，臆するところではありますが，田舎の小さな図書館の頑張っている姿を少しでもお届けできたらいいかなと思いまして参上いたしました。その辺のところをお含みおきいただきまして，どうぞ，この後４０分ばかりお付き合いのほどよろしくお願いいたします。

今回，お声がかかったのは，当館で実施しておりますラインスタンプ，これがきっかけで声をかけていただきました。

うちのマスコットキャラクター「はなわんこ」と申します。鹿角市にはもう１館，十和田図書館がありまして，そちらのマスコットキャラクターは「トワダック」と呼んで，今，両館の宣伝に大いに活躍中であります。

ラインスタンプのこれが一部ですけれども，「へばまんつ」ってわかりますか，今日は全国からお集まりなので，わからない人もいらっしゃるかと思います。

「へばまんつ」は，秋田弁で「ではまたね」英語だったら「Ｓｅｅ　Ｙｏｕ　Ａｇａｉｎ」ですね。「あんべ」は「行こうよ」「Ｌｅｔ’ｓ　Ｇｏ」です。こういう秋田弁のコメントをつけまして愛らしい目が特徴のキャラクターです。この後の説明にもたびたび出てまいりますので，以後お見知りおきのほどをお願い申し上げます。

このキャラクター，当初，ラインスタンプから始まりましたが，現在では，いろいろな形に発展をしております。おせんべいになったり，缶バッチになったり，フェルトのぬいぐるみになったり，ますます私たち以上に活躍の場を広げているところです。

それでは，改めまして，鹿角市立図書館の環境と状況につきまして少し触れさせていただきます。

鹿角市には先ほども触れました，花輪図書館と十和田図書館の２館があります。

花輪図書館は，ご覧のような施設環境になっています。決して大きい図書館ではありません。開館時間は９時から７時。休館日は月曜日です。運営の内容は，まだ小さい図書館ですので貸出冊数に制限があり，１０点です。貸出期間は１５日。蔵書は今のところ８万５，０００冊です。雑誌は５０誌，新聞は１０誌，雑誌のうち９誌が雑誌スポンサーがついています。みな

さんのところでも雑誌スポンサーをやっているところがあるかと思いますが，雑誌を買っていただく代わりに図書館で企業のＰＲをさせていただき，カバーに企業のＰＲをつけます。

一方，十和田図書館の施設環境は，こちらは私設文庫が継承されて公立図書館になった例です。１階に一般閲覧室と児童閲覧室。２階は講座室とありますが，ここはなにも使われていない部屋でした。それを昨年よりＴｏｗａｄａ　Ｇａｌｌｅｒｙという呼び名をつけ，小さな美術館風の活用展開をしているところです。

開館時間は，９時から５時半。大変，閉館が早いです。貸出は花輪図書館と同様で，ここはもっともっと小さい図書館なんですけれども，蔵書冊数が結構あります。私設図書館から譲り受けた，通常動かない図書というのも含まれています。また，移動図書館がありますので，こちらが１万冊。合計で８万３，０００冊という形で運営しております。雑誌は３０誌。新聞は９誌。そのうちの６誌にスポンサーがついています。

移動図書館車も走っています。現在，５５カ所の巡回をしています。小学校，それから福祉施設，いろいろな形で大活躍の移動図書館です。

これが花輪図書館の入り口部分です。上についてある表彰状は，会社からいただいたMVＰ賞。こんな賞ももらって今頑張っているところです。

この図書館，平成２７年４月から民営化になりました。花輪図書館は平成２７年４月に中心市街地に建てられた大きな複合施設２階部分に移転しました。それと合わせて２館とも民営化が図られまして，指定管理者株式会社リブネットが担当することになりました。今大会のテーマでもあります，「もっと地域の中に図書館を」を目指した市としての新しい出発であったかと言えます。

私もこれまで直営館のみでしか働いたことがございませんでしたので，指定管理下の図書館運営は初めての体験です。と言っても，２年間くらいここでやらせていただきまして，図書館員として，現場の人間としてやることは同じだという気持ちでおります。いろいろな決定事項に関しての道筋は違いますが，お互いのメリットデメリットもさまざま。必ずあると思います。ですけれども，持ちえた条件の中でどう展開していくか，そのような戦いがあることはどちらも変わりがないというふうに思っているところです。

鹿角市というところの概要ですけれども，人口３万，本当に小さな町です。みなさんご存知でしょうか，十和田八幡平国立公園を抱えた小さいですけれどもとても美しいまちです。産業としましては，農業や観光。花輪ばやしという，２０１６年にユネスコの無形文化財に登録されました伝統のあるお祭りもありまして，観光業，これも加わっています。特産物としましては，北限の桃，鹿角りんごに鹿角牛があります。

そして，市としての図書館の運営方針はご覧のようになっています。これを受けまして，現場の私たちは私のコンセプトでもあります，０歳から１００歳まで全ての市民の図書館でありたい，そういうふうな思いで運用を進めています。

具体的なものをちょっと画像で見ていただきたいと思いますけども，あまり特別なことはしていません。ぬいぐるみのお泊まり会，これもやっている館が多いかと思います。子供たちが大好きなぬいぐるみを一晩預かりまして，帰りにぬいぐるみが見つけた本を持ち帰って一緒に読む，そういうイベントです。

それから，かるた大会。花輪は百人一首で有名なまちです。花輪図書館は，それに合わせて特別コレクションとして百人一首をはじめ，かるた，それからボードゲームの収集をしておりまして，それらの収集物を利用してイベントをやっているところです。

このほかに，０歳の方には３カ月検診時にブックスタートを行っています。これもどこでもやっている活

動かと思います。

そして，おはなし会ですね，おはなし会は，はなわんこのおはなし会とトワダックのおはなし会と称しまして，毎週土曜日の決まった時間に開催をします。読み手はボランティアさんだったり，図書館スタッフだったり。そして，ここの複合施設は下に子ども未来センターが附帯しておりまして，そちらのお子さんを呼ぶことが多いです。なかなか来てくれないときは，うちから出前のおはなし会に参上いたします。

そして，地元の小学生が来てくれての子ども司書講座です。ちょっと違った雰囲気で夜の図書館を子供たちに楽しんでもらうイベント，それから，十和田図書館の古い怖い雰囲気の書庫を利用しまして，それを逆手にとっての図書館お化け屋敷。工作会は頻繁にやられています。

クリスマスになると，どこの館もそうでしょうが，当館もスタッフもしくはボランティアさんがサンタクロースの格好をして子供たちに絵本を読んでくれているところです。

図書カフェ，これは高校生をターゲットに進路のことを考えてもらうイベントです。地元で活躍されています比較的若い方を講師に迎えまして，先般は若い女性のりんご農家の方，そして和菓子を作っている何代目かの和菓子屋さん。和菓子をつくったり，ケーキを作ったりしながら，それを一緒にいただき先輩から気軽にアドバイスをもらって進路に役立てるというイベントです。

下のほうは１５歳の君にすすめる１００冊。これは，司書が選んだ１００冊のブックリスト。中学校に行ってブックトークをしている風景です。ブックトークは１０分くらいのものなんですけれど，学校現場の中から１０分をいただくのが大変であります。前年度からカリキュラムの中に入れていただくとか，教育委員会とタイアップをして全部の学校に今は回っています。それが，朝の朝礼だったり，お昼の昼礼だったり，放課後の学年集会だったり，向こうの指定に合わせて図書館員が動いて，本をいくらでも親しんでもらいたいというふうな思いで訪問をしています。

そのほか，年間を通しまして図書館見学やインターンシップはたくさん受け入れて，小さい時期から図書館に親しんでもらう，図書館の役割を知ってもらう，そういう意識で拒まずに全部受けています。かなりの数が入っている状態です。

それから読書感想画展示会。花輪にはとても民話が残っています。その民話をボランティアさんに語っていただきまして，あわせて本も読んでいただきまして，その思いを絵にして展示をしているところです。賞もつきます。

出張おはなし会の様子ですね。

働き盛りの年代の方々には「よるとしょ」といいまして，ちょっと普段とは違う図書館を楽しんでいただきたいということで夜の閉館を延ばし，この日は９時まで開館をしまして，少しカジュアルな感じの図書館を提供する，そういう工夫をしています。通常７時まで開館ですけど，７時以降から飲んだり音を出したりします。今，この画面にあるのは，歌っているところとギタリストの演奏です。そして，コーヒーコーナーや自由に過ごしていただくような雰囲気作りをしています。下のりんご箱は，りんご箱アートといいますか，りんご箱展示，それぞれの世界をそこに作ってもらって展示をして，本を紹介して借りていってもらうと，そういう取り組みのワンシーンです。

これも「よるとしょ」ですね。下のほう，落語にラップにライブラリー，語呂合わせですけど，図書館にラッパーが入るなんていうのは，とても考えられないかもしれませんけれども，この時間だけはとお断りをしながらちょっと普段と色合いを変えて，時間を変えてサービス提供をしているところです。

これは複合施設のメリットといたしまして，図書館食堂。本の中に入っているレシピを作っちゃって食べようよと，調理室を使ったイベントです。ここにもはなわんこが出てきます。きっちんはなワンコインカレーと言いまして，５００円で，実費が掛かるんですけれども，地元の食材を使ったワンコインカレーですね。それから上のほうに，太巻きが見えていますでしょうか。あれは切るとはなわんこになるという，これを作るために試作でずいぶん太巻きを食べました。全部スタッフがチャレンジをして「こんなのがいいんじゃないか」と，プロでないのでうまく作れないんで，大きくなっちゃいましてですね，本当に一切れ食べるとお腹がいっぱいというふうな，そういう思い出があります。

羊毛フェルト講座だったり，本来の手作り絵本の講座，こういうこともやっています。

コーヒー講座や紅茶講座は，やはり飲み食いがつくととても評判がいいと言いますか，人が集まりやすいって言いますか，地元のコーヒーインストラクターの方に来ていただきまして，おいしいコーヒーをいただきながら朗読タイムを楽しむと。それがきっかけで紅茶講座ができたり，ハーブティーの講座も今やっているところです。

６０代，高齢者と言っていいのでしょうか，野菜作りのコツ講座。これは市の農林課とタイアップをして，土作りについて勉強をしました。講師は農文協の方です。うちは「お金がない，人がないから何もできないわ」とはしません。お金がない，人がいない，これはもう当然というふうに，そこからアイディアを出してみんなで頑張ろうというのが合言葉です。実は，農文協さんから本を買うと講師がついてくるということで，農文協さんから本を買って，講師の方を招いて，土作りの講座をいたしました。鹿角は雪深い地です。これは，春を待つ時期にやったんですけど，会場満杯のお客様で，私としても「大変なニーズがあるんだな」と，「春を待つみんなの気持ちが集まったんだなあ」と，勉強させていただいた講座でした。

下は，生活習慣病の講座ですね。健康医療課とのタイアップです。それから終活講座。これは，郵便局さんとの連携を図りました。郵便局さんから飲み物の提供，お茶も出ましたし，エンディングノートも出ましたし，うちは全然経費がかからずただ人を集めるだけなんですけれども，Ｗｉｎ－Ｗｉｎの関係です。何か目当てを提供できるところが互いにある，そこの部分を見つけてコラボを展開しています。

下は，介護福祉施設での読み聞かせです。高齢者の多いまちです。待っているのではなくて，介護施設にもお邪魔をして，移動図書館車を走らせ，そしてたまにこうやってお楽しみに朗読会等をさせていただいています。

移動図書館車は，通常の５５カ所は行きますけれども，市で開催するイベント，商工会議所で開催するイベント，そういうときに必ず出るようにしています。地元の人でも移動図書館車を初めて見るというような人もいまして，どんどん目立ったところに出て行ってもらっているところです。クリスマスには，運転者さんはサンタクロースさんに変わります。わんわん図書館，これは狂犬病の予防注射の会場にお邪魔をしました。待ち時間に本を読んでいただくと，こんなふうにいろんな情報をキャッチしまして，こちらから押し売りをしています。

そのほかにもいろんな他団体との連携が特徴です。とにかく助けていただきながら図書館を宣伝していく。助けていただきながら，すっかり乗っちゃうとか。そういう感じで図書館をアピールしているところです。

湯治場マルシェ。八幡平は温泉がたくさんあります。そして，湯治にみえる方が１カ月，２カ月はいらっしゃる方もいるということで，その方たちも本を読みた

いと。ただし，他市，他県の人には貸出ができないというのが鹿角市の規約であります。そこで女将さんに一肌脱いでもらって，女将さんを経由して湯治に来た方々に本を読んでいただく。このマルシェは，その親しくなった湯治場で一年に一回，全国から職人さんが集まっていろいろなお店を出します。そこに図書館も加わって古本市のようなことをやったときの写真です。森の本屋さんですね。

それから，ビールイベントでの出張展示。これは道の駅のビアガーデンのところにビール関係の本を置かせていただきました。

そして，先ほど十和田図書館の２階，なにも使われていなかった講座室をＴｏｗａｄａ　Ｇａｌｌｅｒｙとしましたと申し上げましたが，そこに出展をしてくださいました一部です。趣味でやっていました仏像の彫刻を飾っていただいたものです。この方，８４歳ということで，これをきっかけにとても元気になられた。うれしかったです。

こんな形でいろいろやっているところですけど，ほとんど他館のみなさんもやられているのではないかなと思います。

このほかに特記します事項としましては，うちは斎場，ここにも本を持って行っています。これは利用者さんから，待っている間子供たちが読む本はないだろうかというようなことがありまして，大変デリケートな場所ですので，選書に気を使いますけれども，そういうところにも本を持って行って本と人をつないでいるところです。

それから，文化施設で開催されます行事，文化ホールもあるんですけれども，そこで例えば音楽，演劇，落語，いろんなことがありますけど，その音楽だったら音楽関係の本を常にブックトラックに乗せて受付のところに展示をします。演劇だったら演劇。さらにもっとたくさんの本が２階の図書館で待っていますということをご案内しています。

これでもかというほどのイベントの数なんですけれども，企画は，主軸はこちらで捕まえるんですが，ほとんどスタッフから上がってまいります。本当に自分で自分たちの首を絞めるのではないのっていう思いでおりますが，とにかく楽しそうにやっていまして，私からは，館長として，スタッフにはイベント屋ではないこと，図書館でやる意味を持つこと。つまり本と人をつなぐ，それから資料と人をつなぐ，そこの軸をしっかりと持ってやること，そのことだけをお願いしています。

ともあれ，このような活動展開で平成２８年度の入館者数は以前の５倍に増えました。数字だけで判断するのはどうかと思いますが，まずは小さなまちの図書館の「図書館からまちを元気にしたい」という思いは少しばかり結果に出まして，スタッフの励みにつながっているようです。

しかし，たくさんの例を今紹介したわけですけれども，最終的に私としましては，最も大切なことは，図書館員は図書館員としての使命と誇りをもって業務にあたるということではないかと思っています。

私たちは，憲法にある，知る自由を持つ国民に資料と施設を提供することを使命としています。これは，憲法にも図書館法にも自由宣言にも通ずるものです。公共図書館は年齢の差を越え，性別の差を越え，貧富の差を越え，全ての人が堂々と入ってこられる文化施設です。０歳から１００歳まで，いえ，お母さんのお腹の中にいる胎児から１００歳以上の方まで，どの命にも快適空間を提供し，図書館という場所から本という媒体を通して，ときに希望と光，励ましと憩い，時空を超えた出会いを提供する努力は図書館の義務であろうかと考えています。そして，それができる場所だと信じています。

子供たちには読書への入り口を，児童・生徒には学

習や部活や思春期の悩みへの対応を，子育て中の若い方々には心の余裕や子育ての悩みの解決を，転職探しの方々にはハローワークの情報を。恋愛で悩んでいる若者にはその成功術であったり，失恋の慰めだったり。退職したばかりの人には第二の人生の導きだったり，高齢者の方々には世代を超えたコミュニティの場だったり，障害を持つ方には，自分と同じ体験をしている人からのエールだったり。実に多種多様な応援ができ，一冊の本が人生を変えることさえもあるのです。

私自身もそのようなことを意識して長い間図書館員としてやってまいりました。本を媒体としていますが，本を通してその先にある人を見て仕事をしたい，そういうふうに思っています。

以上でこのお話は終わるんですけれども，少し時間があります。鹿角市に来る前に岐阜県の中津川市という図書館におりまして，そちらの事例も少し付録としてつけさせていただきたいと思いますのでお付き合いお願いします。

ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが，この図書館，建設が途中で中止になった図書館です。中心市街地活性化事業として新しく街の中心に図書館を置く，そういう計画で議会でも８回も建設の採択がされて，竣工式まで終了しました。そして，建設現場には三十何本かの杭も残る，今は「クイの残る土地だ」というしゃれが中津川で言われていそうですけれども，それが市長のリコールという事態まで発展しまして，中止となりました。

私は，この新しくできるはずだった図書館の運営をするために，全国から公募された館長として赴任をいたしました。

赴任後，約１年たちまして，中止の決定が正式にされました。人生でも珍しい経験をしたわけですけれども，複雑な環境の中で，新しい図書館ができなかったからこそ得られた多くのものがありました。新しい図書館，いいですよね，でも，新しい図書館が建てられない自治体もたくさんあります。これは建設が中止になって，じゃあリフォームだけでもしようというふうにして，１０日間で行った作業の様子です。予算もありませんので，「もう市のお金は要りません」と，せめて本箱の配置換えをしました。高い書架は壁面に，低い書架は中央に集めました。全部図書館スタッフだけでやりました。今日いらっしゃっているキハラさんにもずいぶん助けていただきました。そして，こういう感じに変わりました。ここは２，０００円でできたとてもすてきな新聞のコーナーです。本箱の並びを変えるだけでも随分と使い勝手が違ってきます。突然できたコーナーのベンチがとてもすてきな結果になりました。

学習室，ここもあまり変えられないので，スタンドだけでも付けました。椅子やテーブルもボランティアさんが作ったんです。大工さんボランティアといってたくさんのグッズを作ってもらいました。当初，何もないので，ボランティアさんが頑張ったんですけれども，オリジナルの特注の家具を作ってくれるメンバーが揃った図書館ということで，実に豪華版だなというふうに最後には思ったんですけど，そのときの様子です。

こうやってみんなの力を合わせて作りましたが，その影に市民の力が多く働きました。市民ボランティアというよりは図書館サポーターボランティアというふうに自分たちのことを呼び，運営から企画から一緒に考える，そういう団体のみなさんでした。

先週この中津川市の図書館まつりがあって，お邪魔をしたんですけども，今も活躍していました。その方たちの映像をちょっと見てください。

～以下映像ナレーション～

新しい図書館ができるということで市民の方はとても張り切ってこういう団体を設立したそうです。それが一転してできなくなりまして，分解をするところでしたけれども，中身で勝負をしようということでみんなが頑張り始めました。

月替わりの展示もスタッフじゃなくて，図書館ボランティアさんがやるんです。

お菓子協会の方に協力をしてもらってお菓子を提供してもらったイベント例もあります。

これも市の福祉課と連携をしたページですね。

お茶屋さんとも連携をしました。

ないからできることもたくさんあるんだなということを勉強させていただきました。

似たり寄ったりの活動ですけれども，ここは，はがきに絵の感想を書く，そういうコンクールですね。

たくさんの人を講師に呼んで，あなたが主役ということで，展開をさせていただきいました。

地酒の勉強です。飲みながらの勉強ですが，さすがに図書館では飲めないので公民館を利用しました。

献血カーにも来てもらいました。

これは昔話の柴刈り体験ですね。今は「しばかり」というと，ゴルフ場の芝刈りしか想像できないという子供たちがたくさんいて，そういう子供たちを集めて柴刈りをして，最後には焼き芋を焼いて食べ，読み聞かせをしました。

郷土のお菓子を作ったり，パンを作ったり。

お茶会も，ここで使ったお菓子は，全部菓子組合から提供していただきました。２００個。

先ほどもありましたが，講師の謝礼は一切ない，そこから入っていってもらっています。「うちは何にもないです，それでもやってくれますか。」という，心で動いている方々ばかりです。

大工さんボランティアですね。国体で使った檜の板を１００枚いただいてきまして，それで，家具を作りました。そして，私のわがままですが，図書館でバラバラになるんじゃなくて一つになってもらいたいということで市の形をしたテーブルを作ってもらいました。これは大変難しい作業だったと聞いています。

花を生けてくれる花ボランティアさん。万葉の花を飾る万葉の花コーナーですね。

市の図書館条例も作りました。反対で分散していた市が一つにまとまった，私にとっても大変うれしい，議会満場一致の条例の施行でした。

そして，１０月には１０万人を突破したお祝い。

図書館総合展。Ｌｉｂｒａｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｙｅａｒを取りたかったんですけども…。

このボランティアさんも常に勉強熱心にいろいろな館を回って，視察をして勉強を積んでいます。

この年度の最後には１６万を突破しました。昨年は２０万を越えました。新しい建物になって入館者が増えるのは当たり前なんですが，古いままで入館者が増えるっていうのは，もう珍しいかと思います。

そして，この先にみんなが笑顔になったもう一枚の動画を見ていただいて最後にしたいと思います。

条件が整ってから何かをやろうと思っても無理かと思います。もう，あるところでやる。

これは図書館まつりでの一コマですけども，みんながこんなふうに変わりましたよという，そういう動画です。

市長ですね。反対で当選した市長も今や図書館の大のファンです。

～映像鑑賞おわり～

はい，ありがとうございました。

＜情勢報告＞

公益社団法人日本図書館協会
副理事長　西野　一夫　氏

みなさま，お耳を煩わせいたします。

今日のご講演とそれから事例発表でしたが，目からうろこというたとえがありますが，まさにそのように感じた場面がいくつもありました。

植松先生のお話では，図書館の経営とこれからのあり方について，私どもが今まで得た資料よりも深いところでお考えになっているなっていうことを改めて感じました。

伊丹市のことば蔵の館長さんのお話ですが，私は正直言って最低でも二，三百万円ぐらいの事業費がないとこれだけの事業はできないなというふうに思っていたのでございますが，一桁以上少ない予算でやっておられることに衝撃を受けました。これは私どもの図書館運営っていうのは考え直さなきゃいけないと，感銘を持って聞かせていただきました。

新庄市の図書館には，私も去年お話を聞いて，実際に見学させていただいたのですが，図書館の建物はいい建物なんだけど，失礼ながら結構古くて狭い建物なのですね。でも，その中でのサービスに実に工夫に富んだ温かいものが無数にあるんですね。それからまた，古い資料も含めてすばらしい資料がたくさんあるので，ぜひ大事にしていただきたいなというふうに思った次第です。

小林館長さんのお話，特に私は中津川市で実践されたお話が強く印象に残っておりますが，中津川の図書館新設が取りやめとなって市長さんも新設に反対した市長さんに替わられた後で，このような形で図書館を再生する方法があるんだなと実際に教えていただきまして，本当に勉強になりました。ありがとうございました。

さて，これからの私のお話は，この研究集会のために理事長森が用意したものをもとに，お話しさせていただきます。

まず，今の公共図書館の状況について簡単におさらいをいたします。

公立の図書館の数は3，２６１。そして設置自治体は1，３６０ぐらいでございます。

図書館の数は，３，２６１ということで，順調に日本の図書館は増えているということです。

その中身を見ますと，市の図書館はもう９９％。まだ数市できていないところがありますけれども，ほとんど１００％に近い。町がようやく６０％近くなってきて，最近できた町の図書館が非常に元気で，町の図書館が日本の図書館の推進力になっているという感じを受けるぐらい元気な図書館がたくさんあります。ただ，村の図書館が２６％。これはやっぱり村の財政からすると難しいところがなかなかあるのかなという状況です。

貸出も図書館が増えておりますので順調に伸びているようには見えるんですが，ここ数年，むしろ落ち込んでいる。その原因ですけれども，図書館の数が増え，したがって図書館費も増えているんですが，資料費はむしろ減っているということです。そういう状況の中

で私どもは，工夫しながら図書館サービスを行っているということでございます。

これは指定管理者の状況です。簡単に言いますと，今１５％ほどが指定管理になっております。その中身ですけれども，民間の企業が７７％を占め，ほかにＮＰＯとか公社。日本の指定管理については，民間のところが８０％近くなっているという特色があるということでございます。

次に今の図書館の専門的職員の状況でございます。平成８年と比べますと，職員数は約倍になっているんですが，正規の職員の方が約８千人から５千人台に減っている。そのことによって，現在の状況は専任の方が２５％，非常勤の方が４３％，派遣・委託の方が３１％という，非常にアブノーマルな形での配置になっている。日本の非正規の雇用が４０％くらいでございますので，図書館は突出して非正規雇用が多い状況に陥っていると。したがって今，私どもの図書館界で問題になるのは，正規で専門の職員をどう回復して増やしていくかという課題と，それから１館当たりの資料費が１９９０年代に比べて4割以上落ち込んでいますので，これをどう回復していくのかという二つの大きな課題を背負いながら私どもはこれから運動していくということであります。

資料費については，書籍出版協会という出版社の集まりの方々と協力し合って，各政府機関や地方公共団体の組織に要請を去年から始めました。

そして，職員については，７月５日にまちづくりと図書館という課題でシンポジウムを行いましたけれども，そのときに，勤めている職員の司書の方々の労働環境をいかによくし，そして長く働いていただくのかというご意見を多数いただきまして，こういう状況を少なくとも食い止めていく，そして前進させて行く方向になんとか持っていけたらと思っている次第でございます。

さて，その中で，一方では図書館に対する関心っていうものを持っていただかなくてはならない。これをするために，読書推進活動や資料提供の事業というものはもちろん基本事業でありますけれども，それに付加価値をかけて，まちづくりに係るようなさまざまな事業を展開しているかということを昨年調査いたしました。

その結果でございますけれども，７７％の回答があり，まず，自治体の総合計画に図書館のことがちゃんと載っているかというのが６６％ありました。それから，まちづくりなどに貢献する事業をやっている図書館がどれぐらいあるか，４７％の図書館がうちもまちづくりに貢献する事業をしていますよ，と答えていただきました。これは実は，私どもの予想をはるかに越える数字でございました。

そして，その事業の内訳なんですけれども，４０％がいわゆるまちづくりに貢献している事業。にぎわいを増やしたり，あるいは集いを喚起したり，そういうふうな事業をやっていると。

５１％は人づくりでありますけれども，この人づくりというのは，図書館の資料提供そのものが基本は人づくりということでやっているわけですが，普通のおはなし会とかそういうものは除いてあります。人づくりというのは，例えばおはなし会を推進する，あるいは読書を推進する人材を育成している，あるいは，他の機関と連携して人づくりをしている。例えば，ブックスタートなどもそのうちに入っております。これは５１％とたくさんあるのはうなずけることでございますが，仕事づくりにも貢献しているというところが１０％に伸びてきている。

調査を行なうにあたって，図書館がまちづくりやコミュニティに関わりを持って事業をしているのは，まだ点でしかないと思っていたんですが，これだけの図書館がさまざまな事業を展開しつつあるということは，

それが線から面になりつつあるんではないかなというふうな，期待を持たせる数字でございました。本当にこの調査をやってよかったなというふうに思います。

日本図書館協会は，ほかにもいろんな事業を展開しております。

例えば，２０１５年１１月に経済財政諮問会議というところで，当時の高市総務大臣が図書館の地方交付税の職員の積算に指定管理を導入することを前提とした算定方式を提案いたしました。これを称して「トップランナー方式」といいますが，これを実際にやられますと，指定管理はもう加速度的に進んで行く心配があったわけです。実際東京都はそういうふうな算定方式を導入したことによって，あれだけの指定管理者が増えてしまったということなので，私どもは直接大臣にも面談をし，反対の意向をお伝えし声明を出したところでございます。その結果，その翌年に，総務大臣がトップランナー方式の図書館等への導入を見送るということを表明するに至ったということでございます。

今後私どもは，先ほど言いましたように，人の問題，それから資料費の問題，これを二つの柱として公共図書館の再生を図るために，みなさんとともに大きな展開を図っていきたいと思っておりますので，ぜひご支援のほどをよろしくお願いいたします。

＜全体会（パネルディスカッション）＞
もっと地域の中に図書館を
―図書館の多様化する社会的役割―

コーディネーター：植松　貞夫　氏
パネリスト　　：綾野　昌幸　氏
高橋　一枝　氏
郷野目　香織　氏
小林　光代　氏

○植松氏

おはようございます。

コーディネーターではありますが，この９０分間の進行について，前もってきちんとしたプランをたてるよりも，臨機応変に進めたいと思います。最初に，昨日お話ししたことに対して，会場のみなさまからご質問をいただいていますので，順に回答することから始めさせていただきます。

それではまず私から。

「小中学校と図書館のいわゆる合築ということについて，学校にまちの図書館を組み込むという取り組みには，かなり制限があり難しいと思われる」それから，「自治体として社会教育と学校教育のどちらが主管課になるのかという点が難しいのではないか」というご質問です。

実際に，学校と公共図書館との合築の取り組みは，古くは，神戸市で複数の公立学校の中に図書館分館が作られたり，東京都の中央区でコミュニティスクールと名付けて，学校と屋内プールなど区民利用施設とが一体の建築で，区立図書館と学校図書館を隣接させて設けるといった例がありましたが，大阪の池田小学校事件以来，学校のセキュリティが非常にきつくなり，誰でも入ってこられるまちの図書館を学校に併設させるには，安全確保が最大の課題とされ，設計は非常に難しくなりました。

そうは言っても，昨日お話ししたように学校と図書館とが，これから生き延びる二種の公共施設ということで，これを合築する試みが再開されてきています。例えば，立川市の第一小学校図書室と市立柴崎図書館は，お互いに行き来できるような形で設けられています。市内で初の社会教育施設と学校教育施設の複合事例です。当然，セキュリティについての十分な検討に基づいています。

続いて，その複合施設の主管課に関してですが，学校の建築には，の人数に応じた文部科学省の延べ床面積基準が定められています。そして，学校の建築費は法律の定めにより，国が経費補助することになっています。図書館部分には補助金は出ないので，社会教育と学校教育とをその部分で切り分けないといけないことになります。このようなことから，ご指摘のように，複合施設の主管をどちらか一方に決めるのは難しいでしょうね。

二つ目のご質問です。「図書館整備，建設をする上で，図書館の立場として最も意識しなくてはならないこと，大切なことは何であるか」です。これは，図書館及び図書館員の立場から，新しい建物をどう使うか，どう使ってもらうかを，まとめていただきたいということに尽きます。要するに，単に「図書館を設計してください」と言われても，建築家は設計できません。

みなさんが，ご自宅を建てようとするときには，例えば，居間はこのようにキッチンはこんな感じになど細かく注文すると思います。図書館も同じです。これから建てる図書館を自分たちはどう使うか，どう使ってもらうのかについて，細部まで考えていただきたい。これを基にして，部屋ごとの形や，温度・照明の程度、床や壁の仕上げなどが決められます。要するに，こうあってほしい，こうしたいという要求を挙げていくことです。いろいろな要求内容がお互いに矛盾しても構いません。自分たちの図書館はこうしたいんだ，というのをぜひまとめていただきたい。そんなことは当り前ではとお思いかもしれませんが，私の経験では，そのような例は多くありません。

次は，「昨日の事例発表にて，図書館で開催されたたくさんのイベントについてありましたが，それは公民館でやるべき事業との意見が出されて，社会教育内で予算の奪い合いのような状態になりかねません」という質問です。

これには，資金獲得に関しては，もう組織内での競争の時代になったと申し上げるしかありません。黙っていても配分される時代は終わり，市の一般財源という限られたパイを，部局や図書館が取り合う時代です。公民館でやるべき事業だから図書館ではやらないではなく，図書館が積極的にお金を取りに行く姿勢を持たないと，お金はやってこないと考えるべきであると思います。

次のご質問です。「これまで日本の公共図書館の進めてきた貸出サービス，これはこれからも頑張るべきことだということですが，貸出サービス以外の部分に力を入れることで，貸出サービスに割いてきたリソース，つまり人的資源であるとか，金銭的資源であるとか，そういうものを他に振り分けることが適切であるか否か。あるいはこれまで行ってきたサービスについて，新しい取り組みを始めるときに，その辺のことをどうするのか」です。

貸出サービスについて基本的に持続すべきであることは当然ですが，貸出サービスだけを重視することは避けるべきであると申し上げました。例えば，ベストセラーといえども１冊しか買わないとかですね。それから，今非常に増えていますＷｅｂ予約での取り置きサービス，図書館に来ない，書棚を見ないでも，借りられてしまうようなことはしないなど，貸出サービスにほとんど全てのエネルギーを使ってしまうことはやめるべきだと考えています。

資源配分の見直しですが，例えば貸出はセルフサービスで処理してもらうとか。返却についてもセルフサービス化が導入され始めています。職員でなければできない，いわゆる人的サービスに傾注すべきと考えています。

私にいただいた質問の最後です。土浦市の図書館で隣のマンション云々という話をしました。「図書館がそうした何らかの経済活動や不動産等の収入を資料購入費や運営等に充てている事例というのがあれば」ということですが，このような事例は私の知る限りありません。

建設段階では，例えば，再開発ビルの事業費をどう生み出すかと言いますと，それぞれが持っていた部分を少しずつ削って，保留床と言いまして，第三者に売却する床を作り出し，売上金を事業費に充てます。例えば土浦の例ですと，銀行と交番と市が地権者でした。保留床を学習塾に売却して経費の一部にしています。しかし，開館後に図書館の専有面積の中で賃料を得るような事例はないと思います。また，仮にそのような収入を得られたとしても，それを図書館が直接，資料購入費や運営等に充てることは，自治体の会計規則で許されないと聞いています。

加えて，「図書館が周辺エリアの付加価値となっていることが評価されている事例というのがあれば」と

いうことです。ただちに具体的な事例は挙げられませんが，高齢者になってみると，よい図書館が近くにあればいいなと思います。マンションや宅地の宣伝広告には，図書館まで近いといった表示をよく見かけます。子育て支援に熱心な図書館があれば，その近辺に引っ越してきたい若い世帯が増える，となるとその周辺の家賃が上がる，地価が上がるとなっていくわけです。例えば図書館のまち浦安は，東日本大震災での液状化とかにもかかわらず，図書館サービスの水準の高さが評価されて，隣のまちより地価が高いとか，若い世帯の比率が高いということになっています。図書館は周辺エリアの付加価値アップに大いに関連すると私は考えています。

以上が私にいただいた質問への回答です。

○綾野氏

伊丹市立図書館ことば蔵でございます。

私も５人の方からいただきましたので，回答のほうは手短にさせていただきたいと思います。もし，何かございましたら追加で「もうちょっとここ聞きたかったのに」みたいに言っていただければうれしいかなと思います。

まず，お一人目の質問，「さまざまなイベントを開催する中で，図書館利用者からのクレームなどはありますか。自分たちもいろんなイベントをやってみたいと思いながら，利用者からのクレームを考えると弱気になってしまうので，そういったクレームのうまいかわし方などがあれば教えていただきたいです」ということで，ありがとうございます。

確かに最初はクレームがありました。一番は音ですね。１階が交流フロアということで１階で事業をしておりまして，２階が児童室，３階が一般図書ということになってますので，児童のところは子供たちがある程度は声を出したりもしますのであんまりないんですけれど，３階まで音が響いたりもしますので，当初はうるさいということでやっぱりありました。

ただ，それはもう「この時間はこういうイベントをしていますのでどうしても音が漏れます。できるだけ気を付けますが，申し訳ございません」と。タイムシェアの考え方で，この時間はこういうイベントをします，多少音がしますということの掲示もしますし，そういったアナウンスもしてるということで，段々理解を得ていったかなと。

このことば蔵に関しては，今までと違う図書館ですよということで，広報のほうもイベントの記事がありますし，新聞もおかげさまでいろんなことを取り上げてくれます。なので，段々とこういう図書館なんだなと，時代もそういう流れなんだなというのはご理解いただけたのかなと思ったりします。最初に苦情を言ってきたような方が，何度も来館してリピーターになってくださっているということもあり，ある程度ご理解を得られているところがあるのかなと思ったりいたします。

とどめと言いますか，昨年はおかげさまで賞もいただきましたので，そのときも号外みたいなのを配ったり，Ｌｉｂｒａｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｙｅａｒ２０１６大賞受賞館みたいなことを，図書館の周りにも貼ったりしましたので，そういう図書館なんだなという理解を得ているのかなと思います。

お二人目，「コンプライアンス等が問われる現代で図書館のイメージ上，市民からの反対意見や反対運動のようなものはなかったですか」また，「市民企画の中で没になった企画のいくつかを挙げてください。失敗から学びたいので」という質問ありがとうございます。

最初の反対意見，反対運動ということなんですけど，反対運動まではなかったですね。ただ，やっぱり図書館っていうのは静かなものという感覚がございますの

で，反対意見というものはやっぱりありました。先ほどの質問とちょっとかぶるのですけど，段々ご理解を得られるように努めていったというところです。

企画の中で没になったものをいくつか挙げていただきたいということなんですが，基本的には昨日も申し上げましたように，できるだけやっていこう，何かハードルがあるんだったらそこはクリアするようにみんなで考えていきましょうという感じでやってるんですね。ですから少ないんですけど，一つは，ぷんぷん営業のにおいがしてきた企画があったんですが，ちょっと医療行為みたいな感じで，これはどうだろうみたいな感じだったんですね。私たち図書館の職員も，運営会議で発表されたときに「うーん」って感じになったし，ほかの方もやっぱりそうなんですね。「それは違うよ」みたいなことをおっしゃってくださって，自然にその人もやりにくくなったというか，いろいろ言われてやめていったというような例と，あとは，これは自滅する形ですね。運営会議で大きいこと，「こんな会議でこんな大会をしたい」みたいな感じで言って，それはいいなとなったんですけれど，なかなかその方がそこまでできなかったので，自然に消滅していったと。企画を出された方が基本的には主になっていただかないとだめなんで，その企画が出たからと言って，図書館職員が代わりにやったりとか，ほかの方が代わりにやったりすることはありませんので，そういう自滅型というか，こういう提案をしたけれど結局できなかったということはありました。ただ，その方はハートが強いので，その後もずっと運営会議に来ていただいて，またいろんな提案をしてくださっています。いくつかと言えばそんな感じですね。

３人目の方，「ことば蔵の講師料，参加料は無料とのことでしたが，パソコン講座のパソコンとか，それぞれの材料費はどのように調達しているのでしょうか。全て講師持ちですか」という質問です。

パソコンは，昨日事例でも説明させていただいたスクラッチデイ，子供向けのプログラミング講座というのは，全てその人たちで賄っていただいています。ごくごくまれに，ちょっと原材料費がかかるというようなのも出てくるんですね。それは運営会議で，そういうことだったら何百円とか徴収してもいいかという感じであったのが，ラッピング講座という，バレンタイン前に特に女性向けと言いますか，きれいにラッピングできる技を教えていただくというのをやっているんですが，アジアン雑貨のお店の方に来ていただいているんですけど，そのまま持って帰っていただきますので，原材料費がかかりますので，２００円か３００円頂戴したことがあるとか。ノンアルコールカクテルパーティーというのを昨日ご紹介させていただきましたが，それも飲むためにいろんな果物を使ったりとかしていますので，何百円か頂戴したというような形です。数百円頂戴することはありますが，それも運営会議でこれぐらいならいいんじゃないかという料金の決めという形で，でも基本的にはほとんどやりたいと手を挙げた方に持っていただくことにしております。

４人目の方，「まちのにぎわいや交流が盛んになった結果と，図書館の利用者数の動向はどのように関係していますか」ということなんですけど，まず図書館の利用者数なんですけど，５年前に郊外から中心市街地に移ってきたんですが，郊外にあったときは利用者が年間３２万人でした。中心市街地のほうに移ってきて４０万人ということになりました。

今，このことば蔵というのは駐車場がないんですね。身障者の方向けの駐車場が１台あるだけで，一般の方には，民間の駐車場を利用してくださいねというご案内をしています。それもちょっと離れてるんです。郊外にあったときは，１時間無料の駐車場がありました。今まで車でお越しになってたくさん借りたり，重たい本を持って帰ったりしていた方もいらっしゃったと思

うんですけど，そういうことを差し引いても来館者というのは増えているという傾向と，そうですね，貸出冊数のほうも増えています。

私たちのことば蔵ができた宮ノ前という住居地区は，中心市街地でも通行量の少ない地域だったんですが，通行量が３倍ぐらいに増えているというデータも出ています。

最後５人目の方，「特定の企業や団体とタイアップするのは，公共の利益に反することにはなりませんか。イオンやＴＳＵＴＡＹＡだと地元の企業との不公平についてはどうですか。当方の図書館は，連携に消極的です。このままでは生き残れないと思うのですが」ということと，もう一つ「個人やＮＰＯの確かな人物かどうかということに重きを置いています。どうしたらよいでしょうか。アドバイスお願いします」という２点ご質問いただきました。

１点目の特定の企業や団体とタイアップするというのは，多分時代の流れだと思うんですね。先ほど植松先生のご質問にもありましたけど，予算というものがなかなかつかない。うちのほうもすごい少ない予算でやっています。企業の方からアプローチがあったときに，もちろん見極めは大事だと思うんですね。やっぱり図書館にとっても本当にためになるか，市民の方にとってもためになるか，言葉とか本とか図書館に関係することなのかどうかということの見極めは大事だと思います。ただ，それがクリアされて，タイアップしたいとおっしゃってきたら，基本的にはタイアップしたらいいんじゃないかと思っています。

まちづくりもそうなんですけど，特定の企業とか，商店街とか，一緒にやることってかなりあると思います。今の時代，寄附金なんかもね，ここの企業からこれだけもらったとかオープンにもしますし，ネーミングライツで「東リいたみホール」とか，いろいろついたりします。図書館のほうも，私たちも雑誌スポンサー制度をやっていますが，いろいろな企業名が出る雑誌があります。

そういった形でやっぱりこれから民間企業とのタイアップというのは，避けられないと思いますし，向こうからアプローチしてくださったのは，こっちもしっかりＷｉｎになるように見極めは必要だと思いますが，していったらいいんじゃないかなと思います。

ご質問くださった方はご苦労されているようなので，伊丹はこういうふうにやっていますと，全然クレームも来ていませんみたいな感じで言ってくださったらいいかなと思います。

企業とタイアップすると，やっぱり予算的にすごい楽なんですね。チラシとか，自分たちのホームページで宣伝してくれたりしますし，いろんなノベルティを渡してくださったりとかということもありますので，私どもも少ない予算でやっていますんで，予算的にはすごい楽な感じがします。

あとちょっと余談ですけど，ことば蔵には分室と分館が四つあるんですけど，西分室というところはイオンの中に入っています。イオンの中の２階に分室を設けていまして，そこに入っているというような形でやったりしています。伊丹市にイオンは二つ大きいのがありますし，ＴＳＵＴＡＹＡさんも二つありますし，地元企業からそういう不公平感というのも出ていません。地元企業は地元企業でいろんなタイアップをしております。

広報に載るときも，昨日ご紹介させていただいた事業なんかも「イオン×ことば蔵」という感じで堂々と載せていますので，そんな感じで伊丹はやっていて別に問題は起きてないよ，と言ってくださればいいんじゃないかなと思います。

それと，個人とかＮＰＯも確かな人かどうかというのは，確かにそれってあると思うんですね。さっきも，没になった企画で営業のにおいがしたというのがあっ

たんですけど，そういう見極めもこちらのほうからしていただかないといけないと思うんですけど，ある程度，この人，あるいはこの団体ってどうなんだろうっていうところで判断して，どれぐらいの距離を置くかっていう線引きはしていくのは仕方ないことだと思います。そういった目はしっかり自分たちで持っておくべきかなと思います。

以上，みなさんの質問にちょっと簡単な答えで申し訳ありません。もし追加でありましたら，質問していただいた方，おっしゃっていただいたらと思います。

私からは以上です。

○郷野目氏

新庄市立図書館の郷野目です。

新庄市立図書館には二つご質問のほうをいただきましてありがとうございます。

まず一つ目の，出前図書館について興味深く聞いていただいたということで「具体的な取り組みについて，さらに詳しく」ということでしたので，こちらを私からお話しさせていただきます。

どこについての具体的な取り組みかというのは，みなさんそれぞれ興味が違うところだと思いますので，私のほうで簡単にまとめました。

まずｋｉｔｏｋｉｔｏは，基本は月一回第三日曜日と決まっているんですけれども，図書館は日曜日も開館しておりますので，図書館のフロアチーム，それからｋｉｔｏｋｉｔｏ組のほうに分かれて当日は事業を行っております。ただし，８月と１１月は図書館事業のほうが重なりますので，あくまでも図書館事業のほうを重視して，そのときはｋｉｔｏｋｉｔｏには行かないようにしております。

ｋｉｔｏｋｉｔｏの選書なんですけれども，こちらもその月の担当職員がフロアワークの一環の中で選書を行っております。

あとは，BM車なんですけれども，かやの木号は，いわゆるBM車らしいBM車ではなくて，小回りのきく福祉車両を改良したサイズとなっております。ですので基本的にBM専用の本っていうのは，ほとんど普段置いておりません。なのでｋｉｔｏｋｉｔｏに限らず，出前図書館，移動図書館の行き先によって，毎回選書をしているような形になります。ｋｉｔｏｋｉｔｏに持っていくのは大体１００冊が限度になるかなと思います。

あとはいろんな団体さんなどとコラボをしているんですけれども，そのコラボ先，連携先とは一旦打ち合わせをしまして，図書館のほうから「今月はこういうことをしてください」とお願いするのではなく，連携先のほうがどういうことをしてみたいか，ｋｉｔｏｋｉｔｏでどういうことを自分たちはＰＲしたい，こういうことをしてみたいというようなことを聞き取った上で，どういうふうにｋｉｔｏｋｉｔｏで具現化して実行できるかというようなことを一緒に考えております。

読み聞かせのほかにワークショップなんかもありまして，材料費は，元々あるもの，折り紙でしたら図書館でイベントで使っているような折り紙のように，元々あるものを生かしています。あとはしおり作りだったら，リボンなんかは連携しているお花屋さんから結構いただいたりすることありますので，そういういただいたものを大事に使ったりですとか，消しゴムはんこのワークショップなんかは，歴代の図書館職員が手作りしたものを置いて行ってくれたりしていますので，そういうものを活用していろいろ楽しくしています。やはりどうしても，コーヒーフィルターとかフェルトとかが必要になってくるっていうときは，その都度，数百円程度ですけれども，ワークショップに合わせたものを買い足すということはしております。

それから，ｋｉｔｏｋｉｔｏから帰りましたら，そ

の担当の職員が必ず手書きで回覧のノートを書きます。準備の内容，スタッフの人数，貸出冊数，ワークショップ，読み聞かせの参加人数，それからその日の天気もちゃんと書いておきます。「雨だったのでふきんが必要だった」とか，「風が吹いて落ち葉がいっぱいだったので，ほうきやちり取りが必要だった」とか，あとは読み聞かせのどんな本を読んだとか，ワークショップの内容，それから「こういうものが足りなかったので，次回こういうものを持って行ったほうがいいよ」という反省なんかも全部細かく手書きのノートに書いて，職員全員に回覧しまして情報共有するとともに，次回担当する職員のためにもフィードバックを必ずしております。

昨日小林館長さんもおっしゃっていたんですけれども，図書館はイベント屋ではなくて，ｋｉｔｏｋｉｔｏに行くことで，どう図書館の利活用，新規利用拡大につながるか，図書館がやるからこその意義，本と人を結ぶということを意識しながら，取り組みを続けております。

このような形です。ありがとうございます。

○高橋氏

おはようございます。高橋です。

もう一つの質問なんですけれども，「連携交流のプレゼン資料の中に病院がありましたが，具体的には病院と連携してどのような事業，イベントを実施しているのでしょうか」というご質問をいただきましてありがとうございます。

山形県立新庄病院という病院が市内にありまして，そこの新庄病院さんが，県の移転新築計画に入っております。そのような中で新庄市が，病院に「図書館を一緒に併設できないか」なんていうようなことで，地域の方々が盛り上がりまして，計画の中に盛り込んでいただけるように，有志で知事に陳情したなんていうこともございました。

そういうこともありまして，今年の５月から，がん相談支援コーナーの方が「図書館のほうにパンフレットやリーフレットを置いていただけないか」というご相談にいらっしゃいました。うちとしましても，そういう取り組みの中で何か県立病院さんと連携ができたらなんて模索しておりましたので，これはいいチャンスということで，健康情報福祉コーナーっていう常設展示があるんですが，そちらの一角に県立病院さんの情報コーナーを設置させていただきました。

そういったところからつながりまして，今年の９月なんですけれども，県立病院さんのほうで健康まつりというお祭りを市民の方をお招きしてやったところに，読み聞かせをしていただきたいなんていうご依頼がありました。これは本当にもうとてもすてきなことなので，うちのほうでもお伺いして，病院の中で読み聞かせを実施させていただきました。

その後に図書館まつりで，「県立病院さんのパネル展示を今度はお願いできないですか」なんていうことで，その健康まつりで飾ったパネルをそのままうちで展示させていただきながら，看護師さんのユニフォームも借りてきまして，実際にこういったお仕事があるんですなんていうことで，ご紹介をさせていただいたところです。

これからの取り組みなんですけれども，例えば病院の先生に来ていただいて健康講座を開催したり，そこにはうちの図書も展示させていただいて，こういった本がありますなんていうことでご紹介をさせていただいたり，あとはお祭りの中で今年はできなかったんですが，認知症の診断をできるコーナーの設置なんていうことで，看護師さんに来ていただいて，市民の方々が気軽に，病院はちょっと向かっていくのは大変なんだけれども図書館だったら，と来ていただいて，自分の健康や家族の病気についてちょっと知っていただけ

るきっかけ作りということで，病院さんとの連携というようなことをこれからも少しずつ考えていきたいと思います。

これから新しくなる病院の構想なんですけれども，まちの病院として生活の拠点的な形で，これからコンセプトを立ち上げて計画に入るんですが，その中で病院の図書館となったときに，やはり病院には専門の司書がいて，本と病気とその予防治療とか，いろんな形でサポートできるようなそういった体制をきちんと確立していただきたいということで，陳情したということがございますので，今後これから私たちもそういったところにつながりながら行ってまいりたいと思っております。ありがとうございます。

○小林氏

鹿角市立図書館には，二つの質問を頂戴いたしました。あえて記載されているとおりに読ませていただきます。

「図書館職員が誇りを持って主体的に新事業に取り組まれている様子に感銘を受けました。どのようにして彼らの主体性を引き出しておられるのかご教授ください。」というご質問です。ありがとうございました。

大変答えるのに難しいなあっていうふうに思っておりますが，まず私は図書館の三本柱，「施設」と「資料」と「人」，この中で最も重要なのは，言うまでもありません，人だと思っています。立派な施設がなくても，たくさんの資料がなくても，やる気のある人がいたらば，もう万々歳。その意欲をどういうふうに高めていくか。

まず私は，この質問の中の一コマを，帰ったら早速職員に伝えます。「褒められたよ」「新事業に意欲的に取り組まれている様子，みんなに伝わったよ」って，そういう思いで，頂戴しましたこのメッセージをみんなにお土産として持って帰りたい。そういうふうに思っています。ありがたい質問を頂戴したなと思っています。

なかなか，主体性をどのようにって言われても，ピンポイントでお答えすることは，私にとっては不可能です。まず，みんなで頑張ろう。チームで頑張ろう。得手不得手はあるけれどもそこを埋めよう。そんな感じで得意分野を出してもらうことにしています。

それから，たくさんの企画を昨日聞いていただきましたけれども，企画のほとんどはおしゃべりの中から生まれています。「ただいまから会議をいたします」というような形で話し合われた中には，あまりいいアイデアが浮かんでこないのが常ではないでしょうか。普段から少し休憩の時間におしゃべりをする。おしゃべりをするためには，仲良しにならねばならない。そんな感じで普段から職場環境を風通しのいいものにしておく。そして誰か言い出しっぺはあるものの，決まったら一丸となってそれに向かう，手伝う。そして，イベント屋ではありません。時間をかけて立派な展示や立派なイベントをやるのではなくて，本業の本のサービス提供に影響のないように，きちんとスピード感を持って，立派なものを作らなくてもいいので，まずみなさんに親しんでもらえるような工夫を発信する。そういう形でやっています。

お答えにならないかもしれませんけれども，こんなところで，バタバタもがきながらやっているということでしょうか。

二つ目は，「ＬＩＮＥスタンプの販売をされているとのことですが，どなたの発案なのか。どういった経緯で販売に至ったのか。詳しいお話をお伺いしたいです」ということです。

ＬＩＮＥスタンプは，新館の移転に伴いまして，それ以前まで少数のヘビーユーザーで利用されていた図書館をもっと利用者の幅を広げたい，そのために何かをしたい，そこから始まっています。お金はないし，

いろいろな会話の中から，ＰＲグッズとして何かをしたい，その気持ちから始まっています。

最初は，切手，風呂敷，エコバッグ，はがき，こういうものが挙がりましたが，全部投資の資金がいります。それはちょっと私たちにはできないなぁということから，ふいにＬＩＮＥスタンプという話が出ました。

当時既にＬＩＮＥアカウントさえあれば，誰でもスタンプがつくれるＬＩＮＥクリエーターズマーケットって言うんですか，これでたくさん市場が拡大されていましたので，うちの若いスタッフがＬＩＮＥスタンプはお金がかからない，しかも全世界に発信ができるということになりまして，そこにグッドアイディアだなという形で乗りました。

イラストの得意な職員がおりましたので，この得手分野を大いに生かしていただいて「はなわんこ」と「トワダック」が誕生したわけです。名前も「花輪」に語呂合わせて「はなわんこ」，それから秋田犬ですね。「トワダック」も大した理由はないんですけど，語呂がいいので「トワダック」と，軽い感じで決まったわけです。

これは，売り上げとしては金額は微々たるものです。３００円の中からキックバックは何十円というところです。けれども売り上げ以上にＰＲ効果，当初の目的でありました鹿角市立図書館を知ってもらいたい，そして世代を超えた利用者に鹿角市立図書館ここにありみたいなところが届いたらいいなっていう目的には，すこぶる効果がありました。国会図書館や国の電子機器を使う情報誌，これらの取材なども受けまして，担当したスタッフも非常に自信を持って，今原稿を書いているところです。

曖昧な回答になるかもしれませんが，図書館員に自信を持たせ，それがまた自主的な活動につながっていくのではないかなというふうに思っています。

手前のことで恐縮ですけれども，ヨーロッパで勉強した折に，今目録カードにくぎは刺さってませんけれども，以前は目録カードにくぎを刺していましたよね，長いくぎ。あれを刺せるのは，もうライブラリアンしかいない。それを教わったときに，司書の仕事って本当に誇りの持つ権威のある仕事なんだなぁというふうに肝に銘じました。

ライフワークとしまして，私は司書の身分向上を掲げて別の組織で頑張っているんですけれども，やはり，図書館の職場環境はまだまだ不十分だろうというふうに思います。だからこそ，私たちは図書館員ですと誇りを持って図書館で仕事をできるような，そういう思いを，せめて巡り合った司書の人たちには，一緒にやって行こうという感じで毎日奮闘しているそういうふうなところです。

質問とちょっとずれましたけれども，以上がお答えということでご了解ください。

○植松氏

ありがとうございました。

それでは全体で話し合っていきたいと思います。

今回のテーマである「もっと地域の中に図書館を」は当然のことながら，もっとたくさんの，もっと幅広い利用者を獲得するために，図書館がもっと地域の中に入っていこうという決意表明です。

図書館が貸本館だとか，自習館だと思われているのを払拭して，こういう活動を展開することで，綾野さんへの質問にもあったように，多くの人たちを図書館の利用者に切り替え，来館者数を増やすことが求められています。また同時に，一部の熱心なサポーターだけのための活動になっていないかを，反省しながらやっていくことも必要だと思います。昨日発表されたお三方の活動は，まさにそれを実践し成果を挙げていらっしゃるものでした。

まず，私からの最初の質問です。いくつかの図書館

を見学していますが，熱心な館長さんが異動されてしまうと，残念なことに，せっかくの優れた活動もしぼんでしまうことが少なくありません。熱心な館長さんあるいは一部のサポーターだけが支えになっていてはだめだと思います。

持続力・継続性をどのように生み出していくかについて，それぞれの方のお考えをお聞かせいただきたいと思います。

○綾野氏

そうですね。先生がおっしゃるように本当に幅広い方に利用していただきたいですし，一部のサポーターでは，具合が悪いなあと思います。

ことば蔵の活動というのは，私どもの市長が割とあちこちで言うんですね，「こんな感じで市民と一緒にやっています」って。賞を取ったときももちろん言っていました。もちろん広報もよく載りますし，そういうような感じで，市内の方全体にはアナウンスできているのかなと思います。運営会議では大体毎回新しい方にお越しいただけていて，図書館自体は知っていただいているのかなと。来ていただく方も，「図書館」と言わないで「ことば蔵」って言ったり，あるいは短く略して「蔵」と，「蔵行こか」みたいな感じで言う方もいらっしゃるので，非常にありがたいなと思います。

館長の話なんですけど，私はこの４月からの館長でして，それまでの５年間は交流事業だけを担当していたんですね。館長というのは実は別におりました。５年間しっかりその館長が館の管理をしてくれている中で，自分は割とやりたいことができたというような立場で，公園のような図書館ということで「園長」と呼ばれていたんですけど，そういう立場でした。この４月から館長兼務ということになりまして，いざ館長兼務になると，やっぱり，司書の方とすごい濃密にやり取りしていく中で，５年後，１０年後，昨日聖域ではないという話をさせていただきましたけど，本当にそう思っていまして，市民の方に必要とされる図書館でないと生き残れないなと思っています。もちろん交流事業もこのまま続けていくんですけど，私は1年か，もしかして2年ぐらいで館長職は解かれると思うのですが，つなぎの館長だと思っていますので，次の館長に引き継ぐまでにしっかりと５年後，１０年後を見据えて，例えばこういう研修会，勉強会みたいなところにもお声がけいただければできるだけ行こうと思っていますし，視察のほうもできるだけ受け入れるようにしています。そういうネットワークというのはやっぱり作っていっておかないとと思っています。

あとそうですね，司書の方は優秀なんですけど，やっぱり仕方ないんでしょうけど，どうしてもすごく真面目なんですね。自分なんかはずるくやってきたんで結構不真面目な部分があったりするんで，まあ良し悪しはあるでしょうけれど，やわらかいところは司書の方と何とか一緒になって考えていけるようにということで，今すごく司書とやり取りしていて，できるだけ司書に前に出てもらうように努めています。プロパーの司書ってパソコンが１人１台ないんですね。正規の職員は１人１台あるんですけど，プロパーにはないんで，メモが机の上にたくさん置いてあるんです。私は

いないときも多いんで，すごくたくさんの手紙みたいな，そういうメモのやり取りなんかもさせていただいているのがすごくうれしいし，とにかく自分は1年か２年だと思っているんで，その間にそういう自分のネットワークを次の館長に受け継いでもらいたいと思いますし，私の代わりはもちろん誰でもいけると思ってますので，司書に力をつけてもらって，必要とされる図書館にしていくことが大事だろうなと思っています。

なので，館長というのは，多分短期間でしょうけど，そこからどうなるかはわからないですけどね，前みたいな園長という形でちょっと関わりを薄く残すのか，まちづくりに帰るか，全然違う部署になるのか，行政の職員なんでわかりません。どうなるかわかりませんが，そうなったときも最初はサポートというか，運営会議にも出席したり，いろんなネットワークというのはつなげていきたいと思いますし，そのときの館長や職員の邪魔にならないようにお手伝いをさせていただきたいと思いますが，私が代わっても全然大丈夫だと思っています。

○高橋氏

私は館長になりましてから５年目になるんですけれども，私の団体のほうは，一般社団法人とらいあと言いまして，昨日もお話しさせていただいたんですが，指定管理事業を１０年間やっております。その前の業務委託も２年間ということで，長く新庄市立図書館を管理運営しているわけなんですが，その一般社団法人とらいあの理事・役員という方々に支えられながら，理事会とか，あとは四役会議，そういった中で図書館をどう持っていくかということを常にお話しをしながら，進めて行っているところです。

館長しかできない仕事ではなくて，やはり団体として，これからどういうふうに持っていったらいいか。図書館をどう運営していったらいいか。そして生涯学習のまちの拠点として，団体がどう関わっていったらいいかということを常に会議に諮りながら，団体として進めていっているんだというところがあります。ただやはり，司書，私も司書なんですけれども，司書として業務をするところ，それから職員としてカウンターに出るところを，なんていうところも考えながらいるんですが，年齢層的には，職員の中では私が一番上で，その次に４０代，それから３０代，２０代，若くて２２とか3とかまだいるんですが，どんどん次の世代に引き継ぎをできるような体制にだけは持っていっています。

中の仕事も一人が担当するのではなくて，ローテーションをして誰もがどの仕事をしてもできるように，誰でも引き継げるように，お客様に対応できるようなシステムは作っていております。それから，やはり，郷野目のように認定司書に認定されて，専門性を持った司書もおりますので，郷野目をきちんと見ながら下のほうが育っていく，育成していくなんていうこともできているかななんて思っております。

一つ問題があるのが，うちの司書の職員は全て女性なんです。そこが本当につらいところで，本当はもっともっと男性の司書さんも来ていただきながら，もっときちんとした管理とか，防犯の部分や，男性目線でのレファレンスであったりとか，やっていきたいんですが，そこのところが次世代につながるっていう部分ではとても弱いところで，これから難しい問題になってくるのかな，なんて思っているところです。

○小林氏

先日，小学生・中学生が図書館を訪問するという機会がありまして，その質問の中に「館長さんの仕事って何ですか」っていうのがありました。

普段どういうふうに見られているのかななんて気にしながら，とっさに「何でも屋です」と。「お掃除も

するし，カウンターも出るし，クレームも聞くし，会議にも出るし，議会にも出るし，いろいろ何でも言われたことをやるんですよ」という答えをしました。私は，館長も組織の中の一コマ，一人というふうに思っています。大きな市の方針に沿って具体的な道筋をつけていくのが現場であり，そこを預かっている責任者が館長だろうというふうに思っています。

その大きな市の指針，これに沿っていろいろな形があっていいのではないかなというふうに思います。私が代わったら，もうそこでスパッと切ります。次の人たちがその指針に沿って具体的にどういう形で，どういう色合いでやっていくか，それはお任せですという感じですが，先般５年間館長を務めさせていただいた中津川の図書館まつりに行ってまいりました。ちょっとお客様で行く寂しさがありましたけれども，しっかり新しい展開もできていたし，古いところも受け継がれていたし，そういう形で引き継がれていくんだろうと。「これはやっぱり私のほうがよかったよ」だとか，「これは今のほうがいいね」だとか，そういうふうに思いながら過ごしたんですけれども，自分としては意識しているのは，館長でなければできない仕事，広報活動もそうです。今，こんな変なヘアスタイル，昨日から見てて「何あれ？」と思ってるかもしれませんけれども，これ「どすこいヘア」と言いましてですね，お相撲さんのどすこい，どすこい，のヘアで，負けないぞ，どんなことにも負けないぞ，どすこい，どすこいという，もうこれは私のキャッチコピーとトレードマークになっています。先般呼ばれて行ったところにも，おとなしいヘアスタイルをしたら，あれの生を見たかったって言われてですね，最近は厚かましく恥ずかしい部分もあるんですけど，こういうふうにして世間を歩いています。そういうトップセールスマンみたいなもの，館長は恥をさらして自分の館を宣伝していこう，こんな思いは自分自身としてはありますが，ほかの方はほかの方のやり方でやってもらえればいいかなと。私には何もないんで，外目から攻めていこうかなというような，そういう思いでやっています。

注意していることは，何かやれることを常に補佐やスタッフに振ります。最終的にはとことん付き合いますけれども，まずはやってみて，と。そこから私が学ぶこともたくさんあります。いろいろな会議や発表もそうです。昨日も重要な市の会議がありました。でも「私は研究集会に行ってくるから，業務責任者やっといて」と。ものすごい緊張感でやったかと思います。「私も向こうで緊張してやってくるから，あなたはあなたで館長代理としてやってください」と。館長代理の時間をたくさん作って，見ないふりをして見ています。そういう形で次の世代にいくらかでも自分の色を残せたら，自分自身がうれしいなあというふうに思います。

それと，高校生のインターンシップなんかが来ますと，「将来図書館で働きたいんです」と大概こういうことをお話しをします。そういう芽を大切に，楽しんで体験をしてもらって，「将来それじゃあ待ってるからね」という形で，もう大人を通り越して，学生にターゲットを当てています。そんな感じでお答えになっているでしょうか。

○植松氏

ありがとうございました。

先ほどの話にあった，若い職員をどのように育てていくかともつながると思います。主体性を持って活動してくれる職員を作っていくことが持続性を保つことにつながるということだと思います。

今お話しがありましたトップセールスマンとか，アイデアマンとしてさまざまなことをやっていくことで図書館の存在感を増して，役所の組織の中でも図書館の存在感を高めて，予算を獲得していくということが

必要ではないかということに帰着します。真面目でおとしい図書館員を，恥をかいても動じないトップセールスマンに育てることが，館長の仕事と言えるのではないかと思います。

さて，ご承知のように日本図書館協会では，指定管理者制度は基本的に好ましくない部分が多いとの認識に立っているのですが，今回の３例のうち，綾野さんは直営といっても半分以上民間人の感覚の方とお見受けしますが，みなさんのような活動は直営ではできにくいのか，あるいは直営とか指定管理者よりも，先ほどの話に戻ってしまいますが，館長さんのキャラクターに依拠するのかについては，直営の館長さんとしてどのようにお考えでしょうか。

○綾野氏

そうですね，伊丹の図書館は，本館は直営です。先ほど分館や分室が四つあると申し上げましたけれども，そのうちの二つが地元のＮＰＯさん，一つがいたみ文化・スポーツ財団というところが管理してくださっている指定管理なんですね。西分室という，さっきイオンの中に入っていると言ったところが直営です。それぞれやっぱり，いいところはあるかなあと。直営は直営でいいところがあるでしょうし，指定管理は指定管理のいいところがあります。伊丹の方針としては，図書館本館は当面の間は直営で行くということですので，それならば逆に，民間の方とのお付き合いというか，市民の方もそうですし，民間の企業の方とか団体の方とのお付き合いは密にしておかないといけないなということを考えます。

予算の話もありましたけど，公民館とのすみ分けもやっぱりきっちり考えないといけない。音楽のイベントなんかも，完全に公民館的なイベントなんですけど，やっぱり本，図書館の利用者，利用に結びつけたいと思うので，司書に頼むんですね。音楽の関係の本を並べてくれというと，ものすごく早い時間にばーっと揃えてくれます。そんな感じで，こんな本が３階に行ったら借りられますよというアナウンスはしていますし，みなさん終わったあとに手に取って借りてくださったりしています。

直営のプロパーの司書たちは，やっぱり危機感を持ってやってもらわなきゃいけないと思いますし，当分直営で行こうという方針は出ていますが，そうは言ってもわかりませんし，危機感を持ってやらなきゃいけないということは常に言っています。直営なんだけどやわらかい部分というか，真面目だけじゃなくて，付き合いも幅広くしたほうがいいし，おもしろくて市民の方に興味を持っていただけることをやっていこうねっていう感覚は，一緒になって考えていきたいなと思います。

○高橋氏

新庄市のほうは，直営のときに，やはり専門の司書さんがいらっしゃったこともあるんですけれども，せっかく慣れてもすぐ次の部署に変わっていくということで，どうしても継続的な部分が難しくて，そこを何とかして専門の司書をそこにきちんと配置しようっていうところから生まれたのが，この業務委託から指定管理っていう部分がありますので，そこのところが本当に指定管理としての強みなのかなあなんて思います。

その中で，直営時代の館長さんもとてもすばらしい方で，本当に人が少ない中でたくさんの事業を抱えていて，指定管理に移行になったときに，「この人数でこれだけの事業をやっていたの？」って逆に振り返りなんかがあって，そこで精査されて「じゃあこの人数だとやれないからもう少し増やしましょうか」なんて，そういった行政区と指定管理者でいろんな話し合いを持ちながら今に至っています。

事業をしていく中で，ネットワークとか，住民の方々との連携っていうのは，やはりなかなか行政区の方々だと難しいのかななんて思いました。うちの団体のほうには本当にたくさんの商店の方とか，社会福祉協議会の理事長とか，子育て支援の理事さんとかもいらっしゃるので，いろんな間口の中で事業を展開できる，いろんな目線で図書館を見ていただけるっていうところが本当に強みなのかななんて思うんですけれども，また一つ問題がありまして，やはり，指定管理事業はコスト縮減のために図られたというところがありまして，　ここだけの話なんですが，もっと保障があれば，例えばもっと士気も上がるし，研修にも行けるし，いろんなところに出て行けるのかななんて思うのですが，そこのところが大変つらい部分ではあります。ただ，新庄市は全て施設が指定管理事業になっていて，図書館だけもう少し上げてくださいなんていうことはとても言えないので，本当にヒアリングを重ねながら，言っていかなきゃいけないところなのかなと思っております。

○小林氏

会場には，指定管理の館と直営の館がいらっしゃるかと思いますが，言いにくい部分があることも察しますけれども，私は直営の館の館長と，今指定管理の館長ということで，二つの場面を体験をしています。

結果的に，私の性格もあるかと思いますけれども，どちらも一緒という感じに思っています。再度繰り返すようですが，最後は人だろうというふうに思うんです。

直営であれば，やはりさっきの予算の交渉がありましたけど，まず財務と交渉しなくてはいけません。同じ部局内で戦わなければいけません。なんか変な話だなあと思います。中津川では市長部局でしたので，物事が早く決まります。やりたいと思ったら交渉次第で即刻予算も発生するわけなんですけど，一方，指定管理者のシステムだと，これも私たちは現場で会社と交渉しなければなりません。私はいつも職員に「私は一人労働組合代表」と言っているんですけれども，いろいろなイベントをやるにしても予算があります。中津川のあの建設が中止になったときから，私は，お金がないところからの意識で始めようというふうに自分で思っています。ですから，いくらお金があるかは掌握をしていません。できるならいろいろな人から助けてもらう，そういう形でイベントを進めようというのがスタンスです。

やってみて思うのが，意外と助けてくれる人がいるということです。そしてそれらのセールスに行くのは，館長。いろいろなネットワーク，行政の方々はなかなかこのネットワークの隅々までいかないかと思います。ママ友のネットワークなんかすごいですよね。市民の力はものすごくパワーを持っているなあと感じます。これは中津川市でも，行政側の力が必要なときは行政，ボランティアさんや民間の力がいるとき，例えばスピードの速い事業とか，即刻やりたいよというふうなところでは，行政だとやっぱり３カ月とか４カ月とか，予算や議会が絡むと半年以上という感じでなかなか時間がかかることがありますので，そのすみ分けをして使っておりました。

もちろん個人的には，最低限の国民の文化レベルを守るのは行政だと思っています。しかし，その行政側

が手をこまねいているのであれば，誰かがやったほうがいいかというふうに，バリアフリーな考えで図書館員としての立ち位置をしっかり持って，どっちの組織であっても図書館としてやるべきことをやっていくという思いで今はおります。

ですから，組織の一コマなんですね図書館も。どちらとしても同じだろうと。予算的には，はるかに民間のほうがありません。待遇もあまりよくないと思います。いくら館長と言ってもかなり安く抑えられます。本当にヘッドハンティングされた割には条件がよくないなみたいな話で，その代わりそれを武器にしまして，これだから私はこれを通させてもらいたいと。中津川でも，建物は建たなかったんだからこれだけはやらせてほしい，というふうな自分の武器としてさやを抜くときはあります。ですから，結果的に私としてはやはりどこに行っても「人」というふうな思いでいます。

○植松氏

ありがとうございました。なかなか面白い話でした。続けて小林さんにですが，先ほどからお話されている中津川の事例も含めて，理解のない首長さんをどう目覚めさせるかについて，こういうのが一番効くんじゃないかというのをお聞かせいただきたい。

○小林氏

はい。中津川市の建設反対派の市長も，読書とか図書館とかに反対をしていたわけではなくて，政争の具にされたのが図書館だっていうことであります。

読書とか図書館に反対する意味は，もう本当にどこにもないと思うんですよ。ただ，大変利益の見えにくい部局ではあると思います。長い時間をかけて，人づくりをしたり，まちづくりをしていくわけですから，即刻に利益が見えるわけではなく，その辺に少しハンデがあるのかなというふうに思っています。

それと，自分たちが思っている以上に，役所の人たちや市民も含めて，図書館がどんなところかを理解していない。これは相手方の責任だけじゃなくて，私たち図書館で働く側にも問題があるんではないかと私個人は思っています。ですからまず役所の人たちには，全員図書カードを作ってもらう。あなたのまちの図書館をあなたが率先して使ってくださいと。市長にも作ってもらいました。

あとは部局と連携をする。これはすごく部局からブーイングがありましたけれども，月の展示を各部局で回したことがあります。今回は農林課，今回は医療課，今回は税務課とか，そういう形で否応なくローテーションを組んで，図書館に入ってもらって体験をしてもらうといいますか，中学生や高校生の体験学習と一緒のように，まず市役所の人たちから理解していただくと。

それから，当初は反対，賛成のその渦中に私は飛び込んだわけですけれども，反対派の議員の方々にも心のバリアフリーで私は訪問をしました。周囲からは，言ってもだめという感じでストップをかけられたんですけれど，全然その理由がわかりません。図書館で本を読むのに何で反対とか賛成があるのか，私自身はわかりませんでしたので，お邪魔をしたところ，意外と仲良くなれたんですね。自分が政治色を持たない限り，仲良くなれるのではないかとそのとき学ばせてもらい

ました。

ですから，鹿角でもまず議会事務局にも本を配達しています。役所の人にも，まだ全員持っていませんけれども，全員にカードを持ってもらいたいと運動を進めています。それらとのコネクションはやはり館長が率先して，頭を下げていかなければいけないだろうと。

商工会議所にもお邪魔をしています。私どもは，図書館的営業に行ってきますというふうな感じで館を出ることがあるんですけれども，営業活動の一端として顔合わせに行くことがあります。そうするとロータリーだとかライオンズでやらなければいけない事業を持っているんですね。そのタイミングを合わせて，寄附をいただくだとか，文教の委員会のほうで図書館の事業を入れてもらうだとか，結構お互いがＷｉｎ-Ｗｉｎ関係になれるんだということも，動くことによってわかったわけですけど，まず，気持ちをフリーにして仲良くなる。

この間も中津川で市長さんに大歓迎いただいて一献を交えてきました。反対議員の方々も，条例を全員一致でやった時点から，やっぱり反省したと思います。そういう形であまり肩肘張らずに前に進んでいくのがこつなのかなあなんていうふうに思います。

○植松氏

今お話しにでた，図書館は成果や利益が見えにくい場所であるというのは，みなさんが実感なさっていることだと思います。そういう意味で，図書館は金食い虫だと，役所の中で言われることもあろうかと思います。他部局の人々に理解してもらう，市議会や市長に理解してもらう，さらに市民に貸本屋・自習室ではないことを理解してもらう努力を，地道に続けることが，もっと地域の中に図書館が入っていく基本だということを改めて教えていただきました。

ちょっと話題を変えます。

私は今茨城県のつくば市に住んでいますが，隣町が横綱稀勢の里の出身地である牛久市です。牛久市は高度経済成長期に宅地開発がなされた典型的なベッドタウンです。そこに居住する団塊の世代の男性は続々とリタイヤしているのですが，遠距離通勤の毎日で地域コミュニティとのつながりをもってこなかったために、行き場を失っています。そうした男性がどこに行くかというと，図書館なんですね。ただし，来ているけど，その多くはいやいや渋々来ている。それをいかに，サポーター的な人，熱心な図書館利用者，もっと言えば自分のキャリアを生かして図書館で何か人のために活動をしたいなど，リタイヤした男性をどう活用していくか，何かうまい手はありませんでしょうか。

○綾野氏

私たちの図書館は２階には児童書もあるんですけど，雑誌，新聞のコーナーがあるんですね。毎日来られる，リタイヤされた方だなとお見受けする男性の方がいらっしゃいます。来ていただくのはありがたいですし，やっぱり働いてこられて，ご自分で何か手に職を持っていたりとか，いろんな経験をされているんで，なんとかその人たちを運営会議に引っ張ってやろうと思っていたので，雑誌とか新聞を読んでいるところにさりげなく運営会議のチラシを出したり，サイネージがあるんですが，そこに運営会議のみんなの様子が映っているのを見ていただいたりして，そのうちの何割かは会議に来ていただいて，実はこんなことができるんだみたいな感じでおっしゃって，じゃあやりましょうと，その方の思いが実現して，事業になったという形のところもありますね。

昨日のスライドで，昨年のＬｉｂｒａｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｙｅａｒの最終選考会で「趣味はことば蔵です」とスライドに出した方，この方ほんとにそうなんですね。最初は新聞とか雑誌を毎日読みに来ていた方

が，運営会議にお越しいただけるようになって，自分の思いを実現，形にできたというようなこともあって，ずっと今も運営会議に来てくださっています。Ｌｉｂｒａｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｙｅａｒの発表の日も図書館に詰めて，もう今か今かと待っていたらしくて，私たちはもちろん横浜に行っていたんですが，そんな人たちが何人かことば蔵で発表を待っていたと聞いて，本当に取れてよかったなと思えます。

そんな感じでリタイヤされた方もなるべく自分たちのノウハウを生かしていただけるような工夫というか，工夫はできないかもしれませんけれど，そういう運営会議の案内なんかをさせていただいております。

○郷野目氏

新庄にも本当に毎日いらっしゃるリタイヤした男性もたくさんいらっしゃいます。

個人でのボランティア，新聞のボランティアや見回りのボランティアをしてくださる方もいらっしゃるんですけれども，実感としましてはやっぱり，同じ個人ボランティアさんの中でも女性たちのほうが圧倒的にほかのボランティアさんとのコミュニケーションを取るスキルが高いと言いますか，男性のボランティアさんの方はみなさんそれぞれ各自で，俺はこれをするんだぜみたいな感じで，黙々と一生懸命してくださるという印象が強いです。

あとはそうですね，成人講座で郷土史講座を開かせていただいた年もあるんですけれども，そのときは男女の比率で言ったら男性のほうが多かったと思うんですけれど，その成人講座というのは１年の講座なので，本当はそれが終わったら受講生の方たちの中で次につなげて，じゃあ次の年はこういうのしたいねっていうようなご意見を聞いて，次の活動につなげるような機会があれば，もしかしたら自分もこういうのをしてみたいとか，図書館でこういうのをしてみたらどうだろうっていうような形で，その方たちが図書館で次に活動できる場が広がったのかなという反省もあります。それも含めて，男性女性関係なくとは言いながらも，リタイヤなさった男性の方々も図書館で自分のスキルを生かしながら，生涯学習につなげていけるようないろんな講座でしたり，会議なんかもしていきたいなとは考えております。

○小林氏

鹿角市立図書館は，もう即刻サポーターに登録です。そして今まで培ったスキルを講師として発表して，知恵をお借りしたいというふうに口説きます。

たくさん人生の経験をされた中での宝物が詰まっている方々一人一人を，あなたが主役ということで，これはもう即刻サポーターの登録に入らせていただきます。

○植松氏

ありがとうございました。

予定された時間まで２分あります。あと一言ずつご発言いただいて，まとめにしたいと思います。綾野さんからお願いします。

○綾野氏

伊丹市立図書館ことば蔵がやってきたことって，多分どこの図書館も同じように真似できるんじゃないか

と思います。だから視察もたくさん来ていただけるのかなと思っていますので，何かございましたら，私に連絡していただいても結構ですし，あるいは伊丹の近くに来られる用事があれば，お越しいただけたらノウハウも全てお渡ししたいと思いますので，よろしくお願いいたします。以上です。

○高橋氏

いろんな取り組みをほかの図書館さんもなされていると思うので，一つ一つ持ち帰っていただきながら，確認していただいて，いろいろとつながっていけたらなあなんて思っています。

新庄市の図書館はフェイスブックもやっていて，かやの実ちゃんというマスコットキャラクターが図書館を紹介したり，事業を紹介したりしています。ぜひそちらのほうも見ていただきたいなと思っています。

○小林氏

どうもこの機会をいただきましてありがとうございます。

たくさんのことを勉強させていただきましたので，また持ち帰って頑張っていきたいなというふうに思います。

本当にありがとうございました。

○植松氏

今回の全国公共図書館研究集会は，事務局の方が「もっと地域の中に図書館を」ということで企画され，適切な事例を集めていただいたところに，成功の大きな要因があったと思います。

お三方の大変興味深い，アイデアに満ちた活動を詳細に伺うことができて，私自身大変勉強になりましたし，ご参加のみなさんにとっても有益であったと思います。ぜひ，今小林さんからお話しがありましたように，何か一つでも，あるいは一つの言葉でも持ち帰っていただいて，日々の図書館活動につなげていただき，もっとたくさんのもっと幅広い利用者を図書館が獲得できるように，まちの中で図書館が頼りになり，図書館があって私たちはこのまちに過ごすことが幸せだと思ってもらえるような活動を，ぜひ展開していただければと思います。

これをもちまして，全体会を終了とします。

ありがとうございました。